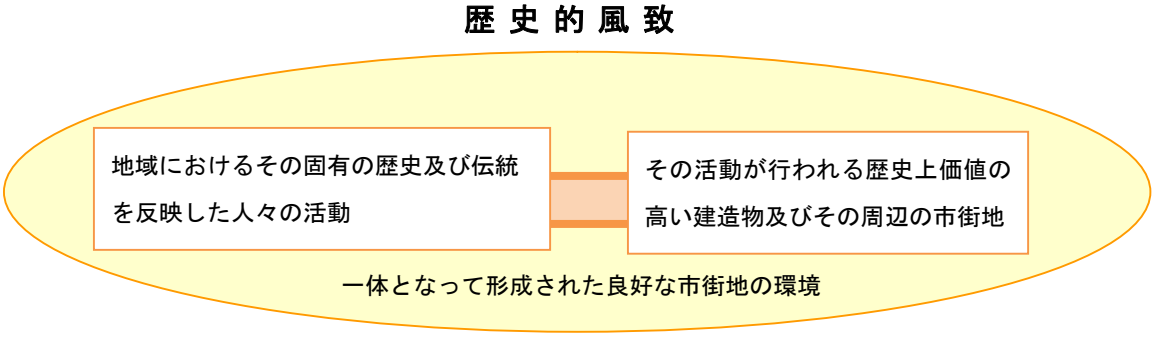
第２章　高野町の維持及び向上すべき歴史的風致

歴史的風致とは、「地域におけるその固有の歴史及び伝統を反映した人々の活動とその活動が行われる歴史上価値の高い建造物及びその周辺の市街地とが一体となって形成してきた良好な市街地の環境」（歴史まちづくり法第１条）とされている。そのため、歴史的風致の前提条件は、下記①～③を全て備えていることである。

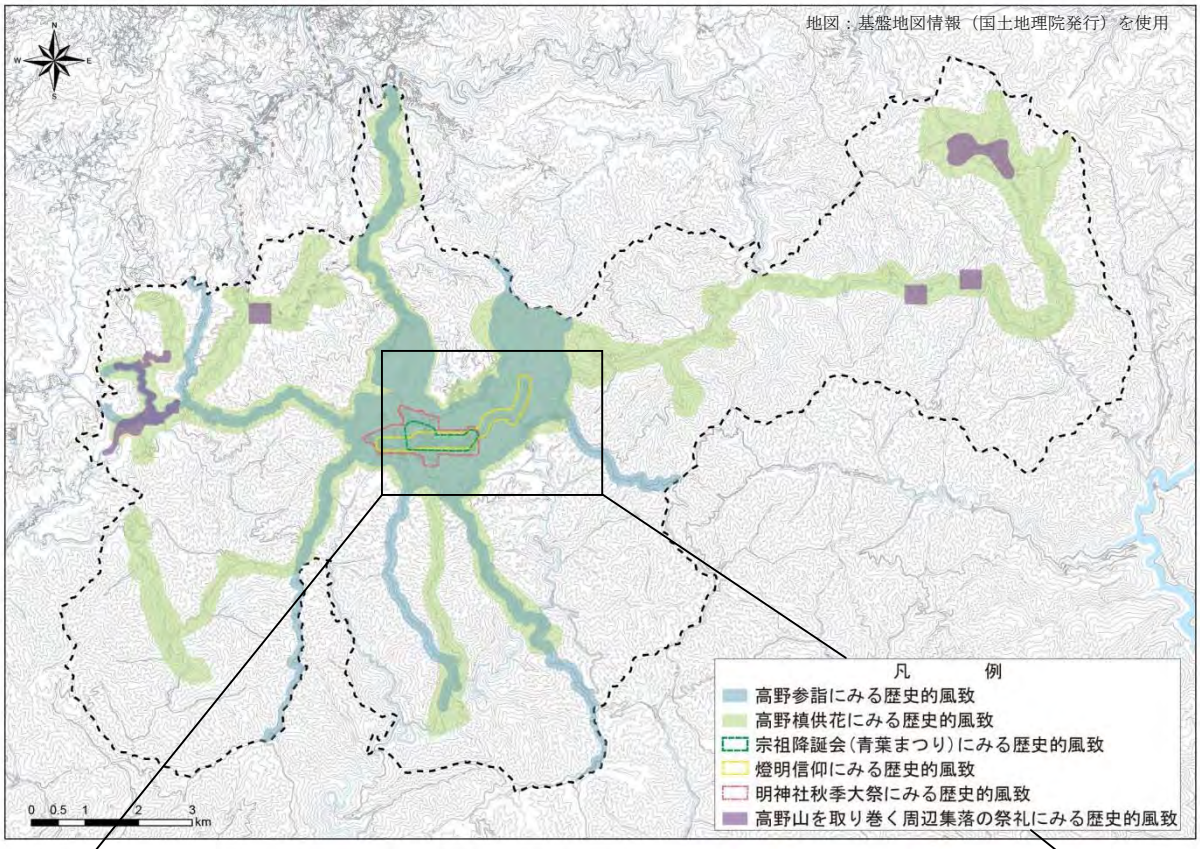
①．地域に固有の歴史や伝統を反映した活動が、現在行われていること。
②．①の活動が歴史的価値の高い建造物とその周辺で行われていること。
③．①の活動と②の建造物が一体となって良好な市街地の環境を形成していること。



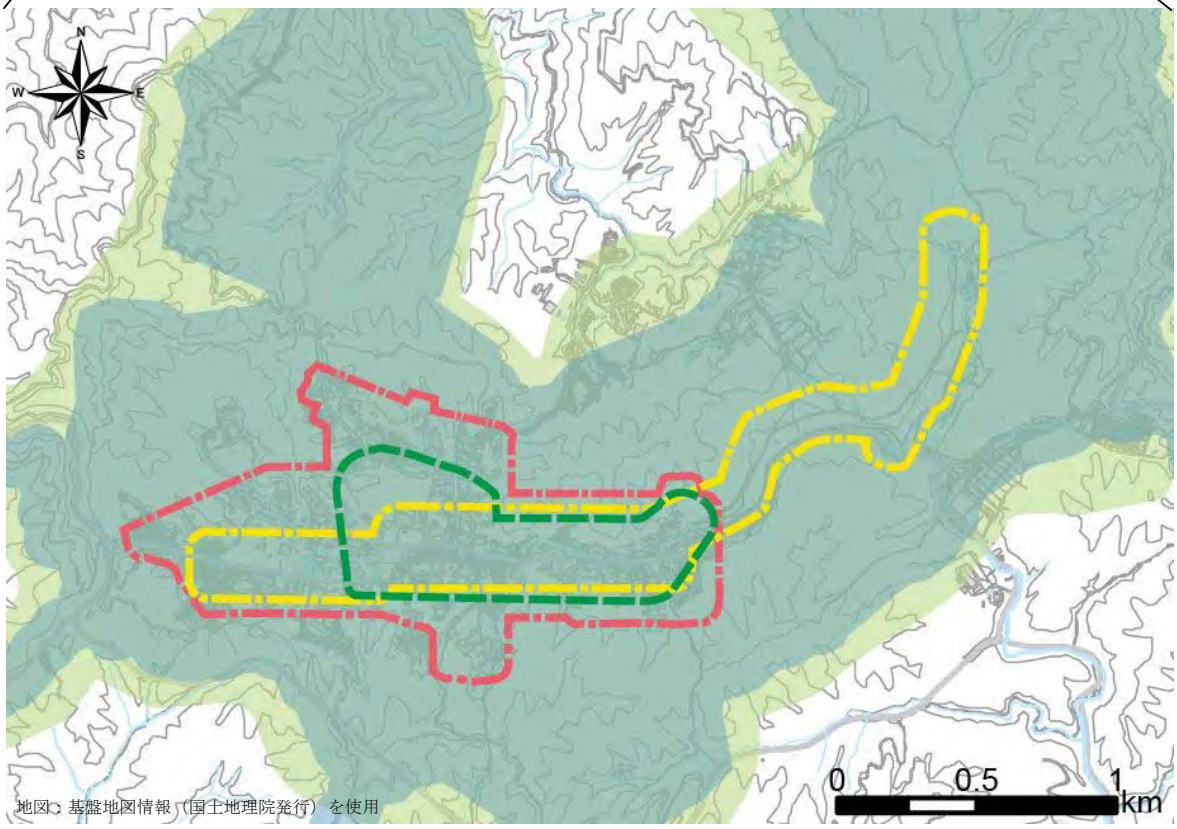
前章で述べたように、1200 年を超える歴史を有する高野山には、壇上伽藍、奥之院をはじめとする歴史的建造物や歴史的なまちなみが残るとともに、そこには固有の歴史及び伝統を反映した人々の活動が現在に引き継がれている。

高野町における歴史的風致は、弘法大師空海による高野山開創から大師信仰の芽生え、発展に伴って、高野参詣が始まり、山内一境内地としての宗教都市のまちなみが形成されるとともに、高野山を支える周辺集落の人々の営みが続いていることといえる。従って、一体となって形成されてきた歴史的風致とは、具体的に次の六つに分類される。

１．高野参詣（こうやさんけい）にみる歴史的風致
２．高野槙供花（こうやまきくげ）にみる歴史的風致
３．宗祖降誕会（しゅうそごうたんえ）（青葉まつり）にみる歴史的風致
４．燈明信仰（とうみょうしんこう）にみる歴史的風致
５．明神社秋季大祭（みょうじんしゃしゅうきたいさい）にみる歴史的風致
６．高野山を取り巻く周辺集落の祭礼（さいれい）にみる歴史的風致



■高野町歴史的風致位置図



■高野山地区周辺拡大図

１．高野参詣にみる歴史的風致

（１）はじめに

高野山は、真言密教の修行道場として弘仁７年（816）空海によって開創された。空海の漢詩文集である『性霊集』（成立年不詳）によると、空海は高野山を開創するに先立って朝廷に土地の下賜を願い出る「上表文」を提出している。そのなかに「修禅の一院」が明記されている。さらに当時の都である平安京から遠く離れた紀伊山地の山中を選んでいることからも、修行への専念が目的であった。

修行道場として成立し、盛衰を伴いながら持続してきた高野山が多くの人々によって“参詣すべき霊場”と認識される契機となったのが、11～12 世紀（摂関・院政期）における貴族による高野参詣である。代表例としては、治安３年（1023）の太政大臣藤原道長、永承３年（1048）の関白藤原頼通、寛治２年（1088）の白河上皇が挙げられる。

このような貴族による高野参詣が活発化した背景はひとつではない。文化的背景としては末法思想の影響が大きい。末法思想とは、ごく簡潔にいえば、日常の隅々にまで浸透していた仏教的な教えが衰えるという考えで、平安時代中期から広まっていった。永承７年（1052）は末法元年であり、多くの人々が不安を抱いている時期であった。また政治的背景としては、摂関政治から院政へと向かう過渡期であり、特に平安京における治安の乱れは人々の不安を大きく煽るものであった。

そのような背景のなかで、「入定信仰」と「高野浄土信仰」が次第に存在感を増していく。前者は、空海が高野山奥之院において生身のまま存在して人々を救済し続けているという信仰であり、後者は、高野山に一度でも参詣すればすべての罪が、その“道中において”消えるという信仰である。

権力者の高野参詣は世間に大きな影響を与え、庶民による高野参詣も増え始める。江戸時代に入ると高野山は全国的に有名な参詣地になる。それに伴い高野山に至る複数の参詣道が多くの人々によって利用され、参詣道に隣接する地域集落なども社会的・経済的な賑わいが創出されるようになった。

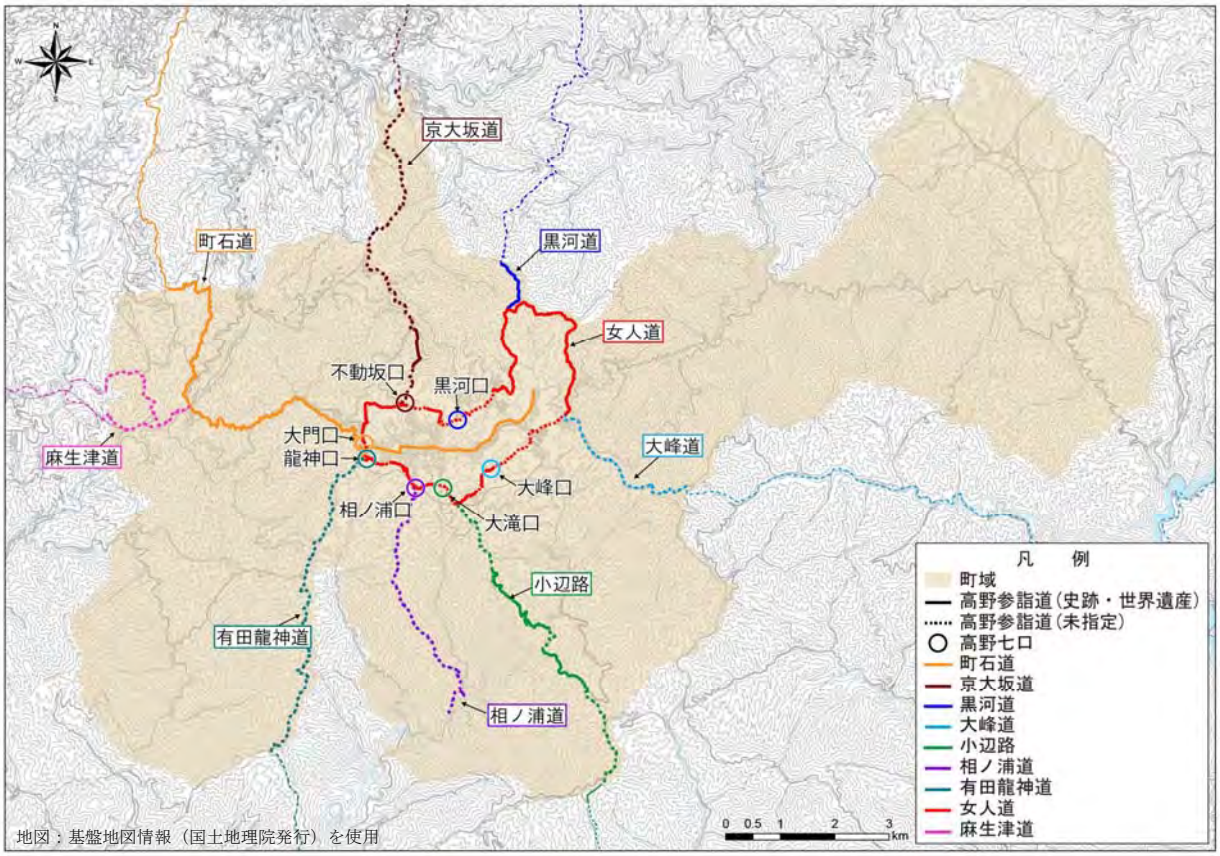
高野参詣において利用された道は、「高野七口」と呼ばれる７本の道である。七口以外の参詣道は、麻生津道と女人道がある。麻生津道は、「高野七口」の一つである町石道に途中で合流する。女人道は、「高野七口」が接続する高野山を巡る。「高野七口」の成立については享保４年（1719）に成立した『高野春秋編年輯録』の「天正９年(1581)10 月５日の項」に「高野山七口」とあり、16 世紀には成立していた。参詣道の経路としては以下の四つに大別できる。

一　紀ノ川筋から高野山に至る「町石道」、「京大坂道」、「黒河道」、「麻生津道」

二　吉野と高野山を結ぶ「大峰道」

三　高野山南部に位置する熊野本宮大社や熊野参詣道中辺路方面と高野山を結ぶ「小辺路」・「相ノ浦道」・「有田龍神道」

四　高野山を巡る「女人道」



■高野七口と参詣道

人々は、自身が居住する地域に近い参詣道を歩き、道沿いに存在する祠や石仏などを拝みながら高野参詣を実践した。高野山を中心にみた場合、参詣道が放射状に延びる形をそなえているのは示唆的である。

（2）「高野七口」と参詣道の成立、変遷

高野七口のうち特に多くの参詣者に利用されたのが、町石道、京大坂道、女人道であるが、参詣道としての性格は全ての道に共通する。

①町石道

町石道は、高野山の表参道であり、壇上伽藍から1町（約109m）ごとの距離を刻んだ町石及び1里（三十六町・約4km）ごとの距離を刻んだ里石が建立されている。成立は、空海が嵯峨天皇から高野山を下賜された弘仁7年（816）以降である。

道は山林に囲まれ、少し歩けば高野山麓の花坂集落まで逃げ場がない険峻さを備える。そのため花坂は宿場町、休憩場としての機能を備えていた。現在でも花坂には茶屋が残り参詣者をもてなす。集落を越えれば再度山中に入り高野山に行き着く。



町石（六十町石）と茶屋

町石道が「参詣道」としての性格を備え始めたのは貴賓・貴族による高野参詣が行われた11世紀である。「参詣道」としての町石道を物語る出来事としては寛治2年（1088）の白河上皇による高野参詣が挙げられる。『白河上皇御幸記』には、「路頭に卒塔婆札など立つ。町数を注す」との記述があり、当初は木製卒塔婆が建立されていた。

鎌倉時代には木製卒塔婆が「町石」に替わる。この事業を指揮したのが高野山遍照光院の僧侶、覚鏡である。事業は文永2年（1265）から20年をかけて弘安8年（1285）に完成した。

町石は五輪卒塔婆の形状であり、真言密教の中心的な仏である大日如来を現すことから、町石は、道標だけでなく、拝礼及び参拝対象となる仏塔としての意味をもっている。

正和2年（1313）の後宇多上皇による高野参詣の様子を記した『後宇多院御幸記』からは参詣者の活動として「参詣の作法」が読み取れる。同史料には「先、礼拝退凡下乗之卒塔婆曰、朕今己宝山入、喜哉（後略）」とあり、上皇はまず下乗石に礼拝した後に町石道に足を踏み入れ、宝山に入ったことに歓喜し、さらに各町石の前で立ち止まり読経したことは「参詣の作法」という参詣者の活動として重要な出来事である。



後宇多上皇高野参詣の様子

『野山名霊集』

②京大坂道

京大坂道は、東高野街道とも呼ばれ、山城国（京都府）を起点とし、長野（大阪府河内長野市）を経て橋本（和歌山県橋本市）、高野山へ至る。成立は道沿いの河根（和歌山県伊都郡九度山町）に高野山と関係が深い丹生神社が応和 2 年（962）に建立されていることから平安時代に遡る可能性がある。不動坂は、京大坂道における高野山側の一区画を指し、約 2.7km と比較的短い距離だが、高低差 310mの急坂で京大坂道最後の難所であった。

京大坂道不動坂の入口付近に所在する神谷は京大坂道の宿場町であった。現在でも宿屋跡の建物が数軒残り、街道宿場町としての面影を残す。実際に庶民による高野参詣が活発化する江戸時代において神谷には繁華な宿場町が形成され、精進落としの場としても賑わいをみせた。ケーブルカーが建設されるまでは、神谷の住民が主体となって不動坂を上る参詣者相手に各種商売活動を行っていた。そのなかには不動坂を登る参詣者の背中を後ろから両手で押し上げながら歩く「腰押し」という特徴的な職業も存在していた。

京大坂道には人工物以外にも参詣の作法に関わる礼拝対象が残る。高野町域に限定しても例えば「四寸岩」は、窪みの幅が四寸（約 12 ㎝）あり、空海の足跡と伝わる。さらに高野山に向かって不動坂に足を踏み入れると最初に待ち構えているのが「いろは坂」という葛折りの急坂である。この坂は、空海作と伝わる「いろはうた四十七字」に由来する。他にも「外不動」と呼ばれる不動堂跡地、巨大な岩盤が露出した「岩不動」などの名所が連続する。



四寸岩

平安時代に起源をもつ不動坂は、大正 4 年（1915）に新しい不動坂が開設されたこと、昭和 5 年（1930）にケーブルカーが開通したことによって次第に忘却されていった。そのようななか、平成 22 年（2010）の和歌山県教育委員会、高野町教育委員会による調査で平安時代の不動坂が再発見され史跡に指定されたことにより脚光を浴び、参詣者が極楽橋から高野山へ向かう経路は、平安時代の不動坂、大正時代の不動坂、ケーブルカーの 3 つになった。本来の不動坂を歩けば途中で大正時代の不動坂に接続し、また木々の隙間からはケーブルカーが望める。これは不動坂における参詣の歴史的変遷を物語る景観である。



■新・旧京大坂道不動坂経路図



京大坂道とケーブルカー

③女人道

女人道は、高野山周辺の峰々を巡る参詣道である。これら峰々は古くから「高野八葉」と呼ばれる。



不動坂口　女人堂　『紀伊国名所図会』

道の途中に集落等は存在しないが、高野山の町中に隣接する箇所も多い。また女人道には各参詣道の接続地点あるいはその付近に女人堂と呼ばれる 7 つの堂が建立されていた。現存するのは不動坂口女人堂のみである。女人堂が担っていた役割はかつて高野山の生活規則であった女人禁制と関係がある。高野山は明治 5 年（1872）の太政官布告までは女人禁制であった。そのため女性は女人道を歩きつつ、道沿いに所在する女人堂をそれぞれ参拝し、さらに宿泊施設として利用した。つまり女人堂は、宗教施設であると共に参籠所でもあった。

近世の古絵図にも「女人堂道」、「女人道」と名称を含めて描かれており、さらに『紀伊続風土記』には「今は結縁のために結界の外郭を巡拝せしむといへども（後略）」という記述がある。結縁（けちえん）とはわかりやすく言えば一般人が仏教と縁を結ぶ、繋がることを意味する。女人道巡りは、当時の女性たちにとって限られた条件のなかで高野山と結縁する方法であった。



轆轤峠絵図『紀伊国名所図会』

『紀伊国名所図会』（江戸時代後期編纂・刊行）には、女性が女人道に存在する轆轤峠（ろくろとうげ）から首を伸ばして山内のお堂や伽藍を目に焼き付けようとする挿絵と記述がある。女性の参詣者が増えてくると地域住民を案内人として雇って「山廻り」とも称される高野山に結縁するための女人堂巡りが行われるようになる。この「山廻り」は、地域住民が案内役を務めるという点で現在でも行われる「語り部」との連続性が見出せる。

女人道は、限られた条件のなかで道を巡りつつ高野山を拝礼するという参詣道としての性格を色濃く残す。女人堂という参籠所や轆轤峠はその典型だが、女人道の峰々もまた信仰の対象であり、山頂には信仰の証ともいえる文化財が存在している。例えば摩尼（まに）山頂には 15 世紀末頃と考えられる一石五輪塔（いっせきごりんとう）のほか、享保 5 年（1720）の地蔵菩薩立像が存在する。楊柳（ようりゅう）山頂には、五輪塔の残欠品として水輪が残る。形態から中世のものと考えられる。転軸（てんじく）山頂には文明 17 年（1485）の一石五輪塔、天文 14 年（1545）の一石五輪塔などが残る。

また現在でも女人道を参詣登山する「三山会」等の団体があり、彼らは参詣に際して修繕箇所の確認や道の清掃等を実施している。

八葉の峰々、女人堂、石造物などは参詣道としての性格を示すものである。性別を問わず参詣者は、高野山を意識しながら他の参詣道と同様に、参詣の作法としてそれらを礼拝しつつ女人道を歩いた。

④その他の参詣道

小辺路は、熊野本宮大社（和歌山県田辺市）と高野山という二大霊場を結ぶ参詣道である。

大峰道は、奈良県大峯山と高野山を結ぶ。修験と関係する天川村（奈良県吉野郡天川村）などを経由し、空海作と伝えられる弁財天坐像を本尊とする野川弁財天や石造物など参詣道沿いに多数の宗教施設が存在している。

相ノ浦道は、中世後期から近世前期に成立した。高野山以南の参詣者が利用する参詣道であるだけでなく、高野山と比較的近い相ノ浦集落を繋ぐ道であった。

有田龍神道は、紀中、紀南方面と高野山をつなぐ参詣道である。「有田」（和歌山県有田市）と「龍神」（和歌山県田辺市）という二つの地名が含まれるのは、実際に道が二手に分かれ、途中で合流しているからである。

黒河道は、奈良方面から高野山へ向かう参詣道である。奥之院北西に位置する子継峠（つぎとうげ）に辿り着き、南下して黒河口に至り高野山に入る。高野山を目前にした子継峠には地蔵菩薩立像を祀る祠（ほこら）がある。像の銘文は「香春峠、永正九　八月廿二日、［上部欠損］十三年、検校重任」であり、永正 9 年（1512）には黒河道は成立していた。

麻生津道は、西国街道とも呼ばれ、西側から来る参詣者に利用されてきた。中世後期から西国三十三観音巡礼札所の宿場町として栄えた粉河寺（こかわでら）（和歌山県紀の川市）周辺が起点となり、高野山を終点とする。経路としては高野山に向かって参詣道を登った先で高野町の花坂に出た後に町石道に合流する。

このように中世から近世初頭にかけて次第に成立していった参詣道としての「高野七口」の歴史は一様ではない。しかし参詣道に関わる人々の諸活動は全ての道に広がりを見せる。

（3）建造物等

①参詣道周辺の建造物

各参詣道上に存在する建造物の種類は多岐にわたるが、中世から近世にかけての石造物が中心となっている。

それぞれの道に所在する石造物等の建造物は、古くから参詣者にとっては参詣の作法として礼拝の対象となってきた。また地域住民の手によって参詣者へのもてなしとして、建造物が建立されている道自体を修繕する道普請が行われてきた。さらに参詣道に隣接する集落では茶屋等が建てられ、多くの参詣者をもてなし続けてきた。

【参詣道】

「高野七口」と呼ばれる 7 本の参詣道は 16 世紀には成立していた。参詣道自体については、町石道が昭和 52 年（1977）に史跡「高野山町石」（現高野参詣道町石道）に、続いて平成 14 年（2002）に小辺路が史跡「熊野古道小辺路」に指定された。さらに平成 28 年（2016）には、京大坂道不動坂、黒河道、女人道が史跡に追加指定された。



京大坂道不動坂

【町石（ちょういし）】

町石は、壇上伽藍を起点に麓の慈尊院（じそんいん）（和歌山県伊都郡九度山町）までの 180 基、奥之院弘法大師御廟までの 36 基の合計 216 基である。文永 2 年（1265）から弘安 8 年（1285）の約 20 年をかけて建立された。

花崗岩製、五輪卒塔婆の形態をもつ。総高は約 3m。正面に梵字（ぼんじ）、町数、施主名、側面に年号が刻まれる。



町石（五十九町石）

180 基の町石は、参詣者を高野山に導く道標であり、また町石自体が仏塔、供養塔であるため参詣者、地域住民共に信仰の対象としての意味を備えている。現存する町石は、鎌倉時代 174 基、安土桃山時代 1 基、江戸時代 15 基、大正時代 26 基である。これは老朽化等に際して新たな寄進者によって道普請同様にその都度修繕されたことを物語っている。

【道標】

京大坂道に所在する石造物としては、道標と華瓶が特筆される。道標は寛政 4 年（1792）に造立されたもので。正面には「右 かミやまきのを いせ京大坂道」、右面には「南無大師遍照金剛」と刻まれる。この正面に刻まれた銘文の意味は、「右に進めば神谷集落（現高野町神谷）を通り、西国巡礼第四番札所であり、槇尾寺の通称で知られる槇尾山施福寺（現大阪府和泉市）及び伊勢神宮（現三重県伊勢市）方面に至ることを示している。形状は方柱形で、材質は花崗岩。総高は 95cm ある。



京大坂道の道標

【華瓶】

華瓶は形態から江戸時代初期に製造、建立されたと考えられる。建立場所である「不動坂」は、京大坂道における高野山を目前に控えた最後の難所である。不動坂には様々な伝承や名所が存在するが、この華瓶が建立されている場所は「花折坂」と呼ばれ同時期の古絵図にも描かれている。正面に「弘法大師御法楽」、「四所明神御法楽」と刻される。材質は砂岩である。特徴的なのは総高 97.4cm という大きさで、高野山に存在する華瓶の中でも巨大なものである。「花折坂」は、名前が示す通り高野山を目の前に控えた参詣者たちが付近の草花等を採取して華瓶に供える拝礼の場所であり、高野山の住民も高野槇等を供花する。



華瓶

【上きしや母屋】

町石道と麻生津道が合流する花坂には現在も茶屋が数軒ある。最も長い歴史をもつといわれる屋号「上きしや」は、昭和 35 年（1960）年頃に現在の場所に建てられた。入母屋造、平屋建ての民家。屋根は瓦型の金属板に葺き替えられている。東に面し、正面中央南寄りに出入口を設け、北側は 2 間半の差し鴨居を入れる。南側は元々土間であり、屋根には洒落た意匠の煙出しを設ける。



上きしや母屋

現在、販売は後に建てられた隣接する建物で行われているが、現在でも母屋では餅、餡の製造からやきもちの焼き上げまで一連の製造が営まれている。

【南海電気鉄道鋼索線高野山駅駅舎】（国の登録有形文化財）

本駅舎は昭和 3 年（1928）に建てられた。木造 2 階建で宝形造鋼板葺である。丸窓など昭和初期洋風建築の意匠を基調とするが、屋根の頂部に宝珠を載せるなど霊場高野山を意識した造形を備える。現在では鉄道及びケーブルカー利用者にとって高野山の玄関口として、参詣者だけでなく地域の人々からも親しまれている。



高野山駅駅舎

②高野山上の建造物

高野山上に一歩入れば、総本山金剛峯寺に属する寺院、子院である塔頭寺院、堂、商家が参詣者をもてなす。加えて全ての道は女人道に接続してから高野山に入るため、入口自体はそれぞれ異なるが、高野山上の建造物は参詣道全般に関わる。高野山全体を指して金剛峯寺と言うように寺内町としての境内地はすべて宗教上の聖地であるが、そのなかでも特に聖域として認識されているのが壇上伽藍と奥之院である。この二つの聖域は国の史跡「金剛峯寺境内」に含まれている。

以上のように高野山は、塔頭寺院だけでなく商家、数々の宗教的意味を備えた墓石群等、多様な建造物が建てられている。そのような仏都、聖地としての特徴的な景観を構成する多くの建造物は、到着した参詣者をもてなすものであるだけでなく、参詣者、地域住民の双方にとって信仰の対象でもある。

【金剛峯寺大門】（国の重要文化財）

高野山の総門である「金剛峯寺大門」は草創期には鳥居であったと伝えられる。幾度かの再建の後、現存するのは宝永 2 年（1705）に再建されたもので五間三戸二階二重門、入母屋造瓦棒銅板葺である。



金剛峯寺大門

【不動坂口女人堂】

本堂は、京大坂道不動坂の終点に位置する。本来は「高野七口」の接続地点付近に七つ存在したが、現存するのはこの女人堂だけである。桁行 12m、梁間 7m、入母屋造銅板葺で柱の面取り等の内部構造から建立年代は室町時代末期と推定される。明治 5 年（1872）に女人禁制が解除されるまでは女性の参籠所（さんろうしょ）・参拝所として利用されていた。



不動坂口女人堂

【金輪塔】

金輪塔は、創建が明徳 5 年（1394）と伝わる。方三間の多宝塔で檜皮葺、下層は角柱で内部には 4 本の円柱が建つ。『紀伊続風土記』（天保 10 年（1839））にも記録があり、現在の建物は天保 5 年（1834）に再建されたものである。京大坂道の終点に位置するため参詣者にとっては高野山への到着を知らせる建造物であり「見つけの塔」とも呼ばれた。



金輪塔

【蓮華定院】

庫裏（くり）は、高野山では格式の高い塔頭寺院に用いられる客殿と台所を一つの大屋根に収める一体型の型式である。入母屋造檜皮葺の大きな建物であり、表門は、切妻造檜皮葺の四脚門である。どちらも、万延元年（1860）に建立された。所縁坊（しょえんぼう）としては真田家と縁のある寺院で、寺紋も六文銭を描く。



蓮華定院表門

【苅萱堂】

京大坂道不動坂に関連する説話『苅萱道心石童丸物語』の「絵解き」が行われる堂である。創建は中世、近世の古絵図にも描かれる。現存するのは昭和元年（1926）に改築されたものである。正面と背面に一重入母屋造平入りの建物を並べ、間を直行する棟で繋ぎ、複雑な構造を備える。木造で、正面側建物のみ檜皮葺、その他は金属板葺きである。



苅萱堂

【珠数屋四郎兵衛店舗】（国の登録有形文化財）

創業が元禄年間に遡る歴史ある商家である。入母屋造、銅板瓦葺の木造 2 階建、正面 2 階中央に唐破風を構える。2 階道路側は参詣客の休憩室としての大広間である。現在の建物は昭和 8 年（1933）に建てられた。



珠数屋四郎兵衛店舗

（4）高野参詣にみられる活動

高野参詣道はそれぞれが独自の歴史を有しているが、参詣道における人々の諸活動の主なものとして次のようなものがある。

①参詣の作法

参詣の作法は、後宇多上皇などによる町石を拝みつつ歩くという行為や徒歩での参詣などが近世後期に編纂された『高野春秋編年輯録』（享保 4 年（1719））や『紀伊続風土記』等の史料にみられる。

有力者による参詣が高野参詣を全国的に有名にしたという史実を踏まえれば、彼らの参詣方法が基本となって参詣の作法が定まり、その後、庶民を含んだ参詣者はそれぞれの参詣道上に存在する石仏や祠などを拝礼しながら高野山を目指した。

現在でも黒河道の子継峠にある地蔵菩薩にはよだれ掛けを供える人が絶えず、また不動坂にある「南無大師遍照金剛」の銘文が刻まれた道標は礼拝の対象でもあり、華瓶には高野槇の他にも周辺で採取したであろう草花を供える参詣者が多い。さらに町石道では町石が建立される地面には五輪塔を思わせる参詣者が積み上げた小石等も見かける。このような参詣の作法は、その発端を町石道としても、各参詣道の開拓・利用に伴い全ての参詣道への広がりを持つものである。町石道、女人道、有田龍神道では高野山の正門である金剛峯寺大門を、不動坂は不動坂口女人堂、金輪塔、蓮華定院等の諸寺院を目にし、礼拝しつつ高野山へと入っていった。

近代以降、鉄道や自動車道の伸張により手軽に高野参詣が行われるようになった。特に鉄道については、約一世紀前にケーブルカーが開通し、高野山駅（南海電気鉄道鋼索線高野山駅駅舎）が開設されて以降、大きく変わらず今日に至る。現在のケーブルカーの中では白装束の参詣者を見かけるのも日常的な風景である。この風景から参詣道に関わる宗教性・精神性が現在でも残っていることがわかる。例えば、現代社会においてなお、白装束に菅笠、そして「同行二人（どうぎょうににん）」と記された白い鞄を身に付けて参詣道を徒歩で登る参詣者も多い。参詣者の姿と山中に響く鈴の音は、視聴覚的に往時の姿を想起させるものとして地域住民の暮らしに溶け込んだ風景となっている。



ケーブルカー利用の参詣者



高野山上の町石道を歩く参詣者

さらに、現代における各参詣道を徒歩で登る参詣者は外見的には多様である。しかしその内実を聞けば、精神修養や自分探しなどの目的が見出せ、そこが参詣道であることを頭に留めつつ、広い意味での宗教性を動機としつつ実践している。このような状況は、高野山以外の多くの場所に古道などが整備・存在していることを踏まえても、

高野参詣道を選ぶという行為において参詣者は、参詣道にそなわる苦行的な歴史性や精神性を意識したうえで参詣道を利用している。

また、奥之院には、参詣者が目指す弘法大師御廟があり、そこでは弘法大師空海が生身のまま瞑想を続けていると言われている。御廟へ続く奥之院参道は町石道でもあり、参詣者たちは参道沿いに建立された墓石や、生身供（しょうじんぐ）と呼ばれる弘法大師に御膳を届ける儀式等を目の当たりにしつつ、都度立ち止まって拝礼する。

つまり、現代社会における高野参詣においても、信仰に関連する参詣の作法は、根底的な部分で残存しており、歴史的な風致として受け継がれている。



町石に拝礼する姿（四十四町石）



僧侶が生身供に向かう姿に拝礼する人々（場所：奥之院）

②もてなし

参詣道における活動として地域住民と参詣者との関わりである「もてなし」がある。女人道以外の参詣道はすべて最終的に高野山内に入ることは先述したが、高野山内の道沿いには寺院はもとより苅萱堂などの諸堂の間を縫うように珠数屋四郎兵衛店舗（正徳 2 年（1712）創業）など土産物店や飲食店等が建ち並ぶ聖俗混交の寺内町として特徴的な景観を形成し、参詣者をもてなす。

また、高野参詣の賑わいは参詣道沿いの集落にも影響があった。町石道と麻生津道が交差する集落である花坂は、宿場町、休憩所として賑わった。

近世の儒学者である貝原益見（かいばらえきけん）が自身の高野参詣を記した元禄 2 年（1689）の『己巳紀行（きしきこう）』に「花坂の茶屋。此処より大門までの間に茶屋なし」とあり、17 世紀には既に茶屋が存在していた。

花坂では今日でも「山がなれども花坂みやこ、何時も宿屋がたえやせぬ」という参詣の賑わいを表現する歌が伝わり、茶屋では名物「やきもち」が販売されている。起源については史料が乏しく不明な点が多い。しかし作家の神坂次郎は、現在の「上きしや母屋」で当時 90 歳の





菅笠で冷まされる「やきもち」

女性を取材し、『産経新聞』(昭和 57 年 (1982) 2 月 19 日) に「花さか婆さん」という随筆を残している。そこで聞き取られたのが「小豆が不足した戦時中は芋を代用した」というものであり、戦時中から既に存在していた可能性は高い。また写真の竹製の菅笠は、焼きたてのもちがくっつくことがなく、効率よくやきもちを冷ますために現在でも用いられている。



茶屋で休憩する参詣者

現在の花坂は参詣者によって休憩地として活用され、茶屋に座って名物のやきもちを食べながら休息をとる参詣者の姿が多くみられる。参詣者、茶屋、名物という諸要素が一体となった様子は、町石道の歴史を物語る風景として定着している。

③道普請

「道普請」は、道の大規模な改修ではなく流出した土砂や崩落個所を適宜修繕する活動である。

高野山にとっても参詣者は、宗教的にはもちろん経済的・政治的にも大切な存在として認識されてきた。特に有力者の参詣による寄進等は高野山に大きな経済効果をもたらした。各参詣道に関係する地域集落にとって参詣者は、茶屋や宿屋等の消費者でもあった。そのため参詣道は、高野山及び集落にとっても重要な資源であり、道普請の担い手は、高野山上に居住する僧侶に加えて参詣道に関連する地域集落の住民の手によって行われてきた。

町石の建立事業を実施する際に覚鑁が著した「発願文」には、「墾道(はりみち)」という記述がある。「墾道」とは「整備した道」という意味である。つまり覚鑁は石製卒塔婆建立と同時に町石道における必要修繕箇所について「道普請(みちぶしん)」を広く呼びかけた。

参詣道が地域住民の生活にとって不可欠な資源であるため、適切な管理は重要な課題である。

女人道には関連する集落は見当たらないが、女人道が聖地高野山の結界的な役割をそなえていること、女人堂が存在していることから高野山において重要な宗教的意味があった。「山廻り」の事跡から、女人道のなかで高野山内を望める地点や現在位置が高野山内のどこに近接しているのか、また東側の高野三山が険峻な山道であることを踏まえれば、女人道は現在における案内人という副業的な労働の舞台であった。そのため、女人道は宗教的理由により、高野山に居住する聖俗問わない住民の手によって参詣道や女人堂の修繕などが行われていた。

女人道西側の嶽(だけ)弁天社では、町民と地方信者を講員とする弁天講を担い手として道の小規模な修繕、清掃である道普請が日常的に行われてきた。また社殿の修繕や祭礼を行う際には併せて必ず行われる。

昭和 8 年 (1933) 6 月 5 日号の『高野山時報』に、社殿の修復と祈祷や餅投が行なわれていることが記されていることから、少なくとも昭和初期には道普請が開始されていたと考えられる。

日常的には講員の中でも町民が行うが、毎年 10 月 18 日には地方からも講員が集まり、金剛峯寺法会課、塔頭寺院住職により秋祭りが開催される。多くの担い手が集まるこの日は、祭りに先立って普段よりも大掛かりな道普請が行われる。

道普請は、参詣の作法である拝礼箇所を守り伝えるものであるだけでなく、参詣者へのもてなしという双方の活動が重なっている。



嶽弁天社

以上のように、高野参詣道における道普請もまた参詣と同様に連綿と伝えられている。道普請は現在では、個々の高野町民をはじめとして、土地所有者、民間企業などの手によって、ときに共同作業として実施されているほか、参詣登山等のイベント開催に合わせて保全がなされている。このようなそれぞれの参詣道で実施される「道普請」という活動は参詣の歴史を現在に伝え、未来においても地域内外の人々に広く定着し、発展する可能性を感じさせる。



弁財天社秋祭り



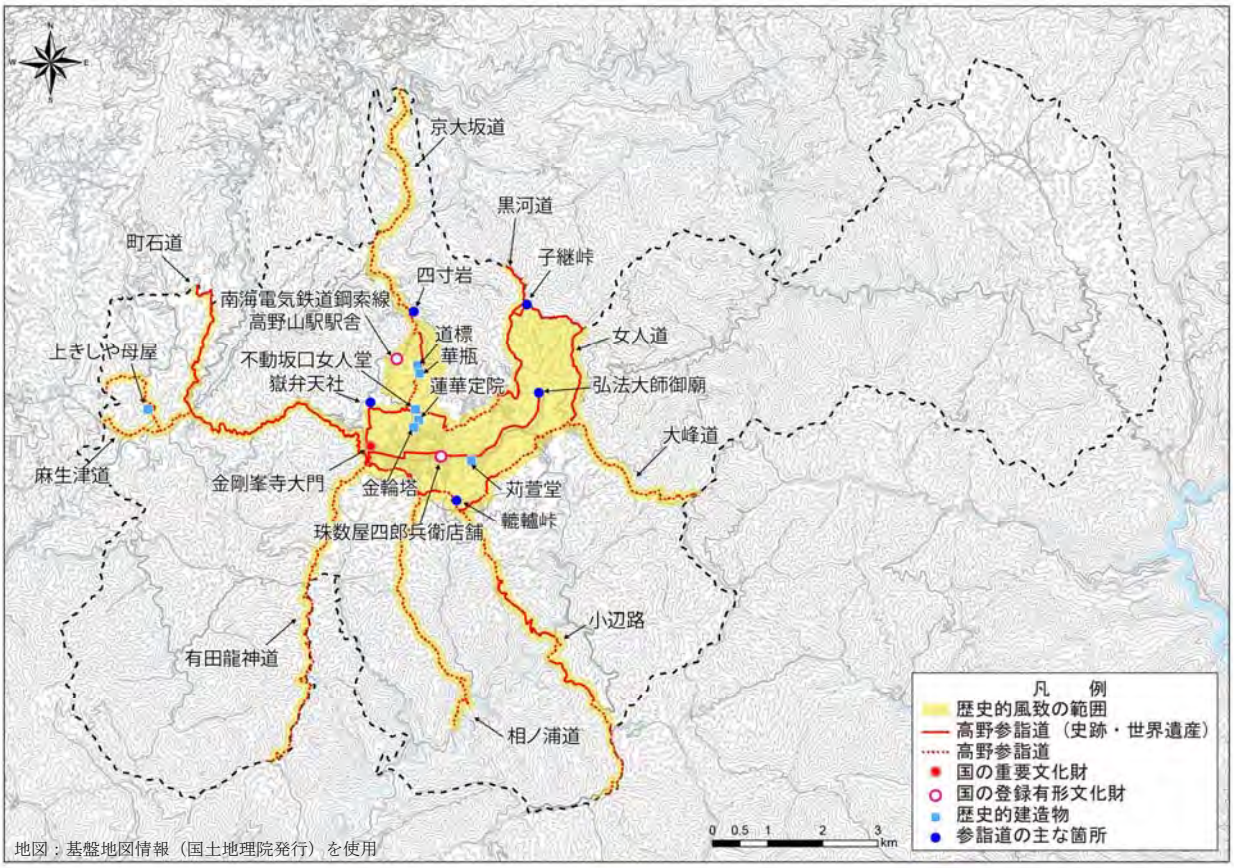
参詣道の道普請



参詣道の道普請

（5）まとめ

高野参詣の関連遺産に拝礼しながら参詣する姿や道普請等の地域の人々のもてなしは、今も大師信仰によって支えられているところが大きい。遠くから高野山を目指してくる人々の想いと地域の人々のもてなしの心が、歴史的遺産の風景と重なり合い、高野町独特の歴史的風致を形づくり、これからも継承されていく。



■高野参詣にみる歴史的風致の範囲

２．高野槙供花にみる歴史的風致

（１）はじめに

高野町は、紀伊山地にある標高約 800ｍの盆地を中心に開かれた高野山と山間の周辺集落によって構成されており、各集落の周辺には豊かな山林が広がる。この山林は、高野槙（こうやまき）・檜・杉・松・栂（つが）・樅（もみ）の六種の樹木を「高野六木（こうやりくぼく）」として保護育成するという古くからの金剛峯寺の慣例によって形成されたものである。



塔頭寺院門前の高野槙



高野槙の枝



高野槙の葉

なかでも高野槙は霊木として重視されていたため、和歌山県指定の天然記念物「高野槙の純林」のような全国でも高野山にしかみられない高野槙のみで形成される純林をはじめとして、多くの良好な高野槙がみられる。高野槙は、コウヤマキ科コウヤマキ属コウヤマキのことを指し、日本固有種の常緑針葉樹の高木である。高野山に多く自生する槙であることがコウヤマキの和名の由来ともいわれる。

現在、高野山を中心とした地域では、高野槙を仏花として重用する風習があり、町の各所で供花（くげ）された高野槙や参詣土産に高野槙を持ち帰る姿がみられる。

（2）建造物等

①高野山上の建造物

高野山は、奥之院と 117 か寺に及ぶ塔頭寺院や町家等が建ち並ぶ寺内町によって形成される。奥之院は、20 万基を超えるともいわれる墓石や石仏等が建ち並び「金剛峯寺境内」として史跡に指定されている。その中には全藩の半数近くになる 100 藩を超える藩主の墓所の他、様々な堂等の建造物があり「金剛峯寺奥院経蔵」、「松平秀康及び同母霊屋」、「上杉謙信霊屋」、「佐竹義重霊屋」などの重要文化財の堂や霊屋も数多く存在する。寺内町には、壇上伽藍や総本山金剛峯寺、塔頭寺院の堂塔や民家等がみられ、路傍には墓石や石仏、祠等が至る所にみられる。

このように高野山上には、堂塔、塔頭寺院、祠、石仏等の石造物、霊屋や墓所等の宗教的性格を持つ建造物や民家や公共建築物が至る所にあり、そのほとんどが中世から近代にかけての歴史的建造物である。宗教的性格を持つ歴史的建造物は、それを対象として日常的に高野槙が供花され、民家では、盆に玄関先に盆棚が祀られ高野槙が供花される。公共建築物等は、それ自体は供花の対象とならないが、隣接する祠や石造物に供花された高野槙と一体となり高野山独特の景観を形成している。

【佐竹義重霊屋】（国の重要文化財）

正面三間、側面一間、背面一間の切妻造檜皮葺。柱間は、卒塔婆形の角材を正面の両脇に 3 本ずつ、両側面に 12 本ずつ、背面に 19 本の合計 49 本の建て並べそれぞれに四十九院を刻銘する。正面向かって右の柱に「常陸国佐竹為義重逆修造立之」、左の柱に「慶長四己亥十月十五日」と彫刻されており、慶長 4 年（1599）に佐竹義重が生前に自分のために建立したものである。



佐竹義重霊屋

【井伊直政霊屋】

正面三間、側面二間、背面一間の切妻造銅板葺で正面に唐破風を設ける。柱間は、上部が卒塔婆形となる板壁であり、正面の板壁に「為泰安大居士」と井伊直政の戒名が刻まれる。内部に宝篋印塔がおかれるが、紀年銘はみられない。建築様式から 17 世紀頃の建立と推定される。



井伊直政霊屋

【伊達政宗墓所】

寛永 14 年（1637）5 月 24 日に伊達政宗一周忌の追善のために建立された墓所である。墓所の中央に政宗の供養塔として、総高 4m以上になる花崗岩製の大型五輪塔を置き、周囲に四十九院の刻銘のある 49 本の玉垣を配し、正面には石造明神鳥居を置く。政宗の供養塔は、石田将監など殉死した 20 名の忠臣の五輪塔 20 基に囲まれる。



伊達政宗墓所

【観音堂】

千手観音を祀ることから千手堂とも呼ばれ、高野山上の地区名の一つである千手院谷の名の由来となったといわれる堂である。桁行三間、梁間四間、切妻造鉄板葺。鰐口銘が明和 3 年（1766）、扁額銘が寛政 8 年（1796）とあるため 18 世紀後半の建立と推測される。



観音堂

【頬截地蔵】

頬截地蔵は、総高 154 ㎝、像高 112 ㎝、幅 58 ㎝の砂岩製の舟形光背の地蔵菩薩立像の石仏。刻銘から永禄 8 年（1565）に造立されたことがわかる。名前の由来は、この地蔵の頬にある傷が、人の身代わりに頬を切られたためとされる。そのため身代わり地蔵ともいわれる。



頬截地蔵

【おたけ地蔵】

不動坂口女人堂の向かいにある高野山上で最大の鋳銅製の地蔵菩薩坐像。像高約 4.2m、切石積基壇を含めた総高は約 7.4m。刻銘から延享 2 年（1745）に造立されたことがわかる。江戸の元飯田町の「横山たけ」さんが亡夫の供養のため、高野山に参詣し、女人堂に参籠しているときに夢に地蔵が現れたことから造立した。



おたけ地蔵

【和合庵（国の登録有形文化財）】



和合庵

大正４年（1915）に建てられた住宅。敷地の中央に主屋、南に塀、北端に土蔵、主屋の南東に門を置く。主屋は、桁行４間半、梁間４間、南北棟、入母屋造鉄板葺の木造２階建。土蔵は、桁行２間半、梁間２間の切妻造桟瓦型銅板葺の２階建で、外壁は白漆喰塗で腰に竪板を張る。塀は、長 7.4mの桟瓦型銅板葺の木造屋根塀。外側がひしゃぎ竹、内側が杉皮の網代組。門は、寄棟造鉄板葺の腕木門で、北面に「和合庵」の扁額を掲げる。

和合庵に代表される高野山上の住宅では、盆に玄関先で新仏や無縁仏を祀る盆棚が飾られ、そこには高野槙が供花される。

【高野山大学図書館（国の登録有形文化財）】



高野山大学図書館

約 30 万冊に及ぶ仏教書を収蔵・公開するための施設として、昭和４年（1929）に建てられた。鉄筋コンクリート造地下室付三階建。設計は、関西建築界の父と呼ばれる武田五一によるもので、創建当初は、東洋一の図書館と称された。

この図書館では、隣接する石造物に高野槙が供花されており、供花される高野槙と歴史的建造物が一体となっている。

②周辺の集落の建造物



周辺の集落　民家と高野槙畑（湯川）

高野山の周辺の集落は狭小な平地に古民家が点在し、その周囲には高野槙栽培畑が広がる。集落内には、堂や近世以前の石塔も残る墓地、近代以前の古民家等の歴史的建造物が多くあり、どの集落においても近世頃の集落景観をよく残している。また、各集落間をつなぐ道沿いの至る所に石仏や祠が置かれ、現在も周辺の住民によって祀られている。

山間にある集落は、山地の中の狭小な緩斜面等を利用し、数軒程の家が集まって集落を構成する。石垣等で平坦面を造成し、民家を置きその周囲の斜面地等を利用して高野槙畑をつくる。墓地も周辺の山林などに家ごと、もしくは集落単位でつくられる。民家は、敷地中央に主屋、その左手に納屋を配する事例が多い。主屋は、入母屋造茅葺。納屋は、本来は平屋の茅葺であったが、戦後に改築されているものが多く、入母屋造金属板葺の２階建が多い。

このような周辺集落においても堂、祠、石仏、墓石等宗教的建造物を対象に高野槙が供花され、民家では、盆に庭先や玄関先に盆棚が祀られ、高野槙が供花される。

【西岡家住宅】

湯川地区にある民家。山間部にある緩斜面地を石垣によって造成した平坦面に主屋、その左手に納屋を配する。家主によると、主屋は明治時代に建てられたもので、桁行 10.8m、梁間 8.2m、入母屋造茅葺であり、現在は茅をトタンで覆っている。納屋は、桁行 9.2m、梁間 7.1m、入母屋造瓦葺きの２階建である。かつて茅葺の平屋建であったものを昭和 32 年(1957)に改築したものである。



西岡家住宅

【子安地蔵堂】

樫原地区の子安にある桁行三間、梁間三間、寄棟造金属板葺の堂。建立時期は不明であるが、天保 10 年（1839）の『紀伊続風土記』にもみられることから、江戸時代には存在したと思われる。現在の建物は、棟札から明治 29 年（1896）に再建されたものであることが分かる。



子安地蔵堂

【子継地蔵】

子継峠に置かれる緑泥片岩製の舟形光背の地蔵菩薩立像の石仏。総高 84 ㎝、像高 59.6 ㎝、幅 40 ㎝であるが、上部が一部欠損しており、本来は総高 120 ㎝ほどになると思われる。この石仏には「香春峠　永正九壬申八月廿二日」とあることから永正 9 年（1512）に造立されたものである。





子継地蔵

【宝蔵院墓地】

東富貴の宝蔵院境内にある墓地。様々な墓石や石仏が建ち並ぶ。その中には、花崗岩製の五輪塔、緑泥片岩や砂石の一石五輪塔、砂岩製の舟形光背の石仏など、江戸時代以前のものも多く残る。



宝蔵院墓地

（3）歴史と活動

①高野槙の供花

高野山では、「禁植有利竹木」という花樹等の植樹を禁止する禁則のため、古くから高野槙が花の代用品として仏前への供花に用いられている。この禁則については、文永 8 年（1271）7 月の置文（おきぶみ）があることから、高野山における高野槙の供花は鎌倉時代には行なわれていた可能性がある。

高野槙の供花についての確実な記録としては、元禄 6 年（1693）の『浮世栄花一代男（うきよえいがいちだいおとこ）』に「高野槙のしんを一本三文にて調え手づからさげて帰れば（中略）佛お前様の花瓶の水かへらるるも」とあり、正徳 2 年（1712）刊行の『和漢三才図会（わかんさんさいずえ）』の高野槙の項目に「於紀州高野山人折小枝葉供佛前」とあることから、元禄 6 年以前から高野槙の小枝が仏前に供花されていた。また、江戸時代後期に刊行された『紀伊国名所図会』には、文政 12 年（1829）に奥之院に建立された江戸焼死者の供養塔前の花立に高野槙の小枝が供花される様子が描かれており、供養塔も高野槙供花の対象であったことがわかる。



供養塔供花が描かれた絵図
『紀伊国名所図会』



現在の江戸焼死者供養塔

高野山を中心に行なわれていた高野槙の供花は、『紀伊国名所図会』において高麗陣敵味方戦死者供養碑の前を参詣者が高野槙の枝を持ち帰る様子が描かれているように、高野山への参詣者が土産として高野槙の枝や苗を持ち帰ること等で高野槙供花の風習が広まり、現在では高野山を中心に関西の真言宗信者の間で広く行なわれるようになっている。

現在、高野槙の供花は、高野山上や周辺集落の至る所でみられる。供花は、堂塔や墓石、路傍の石仏や祠等の宗教的性格を持つ建造物を



高野槙の枝を持ち帰る参詣者の絵図
『紀伊国名所図会』

対象として、その前面に置かれた花立に挿して行なわれる。盆や彼岸の時期が特に盛んであるが、常緑樹である高野槙の特性から年間を通して供花に用いられている。また、供花の対象によって、高野槙の枝の大きさも異なる。40cm 程の整った小枝を束ねた枝葉を用いることが多いが、堂塔や塔頭寺院の前等に供花するものは、幹の先端を伐採した芯（しん）とよばれる 100cm を超えるものが用いられる。

高野槙が供花される対象は、①高野山上や周辺集落にみられる各種墓所、②塔頭寺院や周辺集落にみられる堂、③石仏や祠、④民家の４つに大別できる。

各種墓所は、佐竹義重霊屋や井伊直政霊屋等の霊屋による墓所、伊達政宗墓所や河野家等の五輪塔を用いた大名墓、高野山上や周辺集落の各所に点在する一石五輪塔や一般の墓所がある。これらは縁者によって、彼岸や盆の時期を中心に先祖供養として高野槙が供花される。一般的には枝葉が用いられるが、大名墓等の大規模な墓所では芯が用いられることもある。また筒香の栄山寺（えいざんじ）のように墓石を持たない埋葬地においても供養のため高野槙が供花される。



墓所（河野家墓所）への供花（高野山地区）



高野山上の墓石への供花（高野山地区）



周辺集落の墓地での供花（湯川地区）



栄山寺の埋葬地での供花（筒香地区）

堂は、高野山上にみられる観音堂や奥院経蔵、周辺集落にみられる子安地蔵堂等がある。これらは、寺院や講等の管理団体によって日常的に高野槙が供花される。用いられる高野槙は大型品である芯が多用される。



堂への供花（富貴地区）



塔頭寺院前の供花（高野山地区）

石仏や祠としては、頬截地蔵やおたけ地蔵等のように高野山上の奥之院や寺内町の各所にみられるものや、宝蔵院墓地等のように集落内墓地にみられるのもの、子継地蔵のように集落間を結ぶ街道沿いに見られるものがある。これらは、近隣の住民によって日常的に高野槙が供花される。用いられる高野槙は、枝葉が多用される。



地蔵への供花（南地区）



集落間の祠への供花（平原地区）

和合庵や西岡家住宅のような民家では、盆の時期には、各家の玄関先や庭先に盆棚（ぼんだな）が置かれ、高野槙が供花される。盆棚の形式は各集落で若干異なるが、どの地区においても高野槙は、盆棚を飾る欠かせない仏花として重用されている。用いられる高野槙は、ほぼ枝葉に限られる。

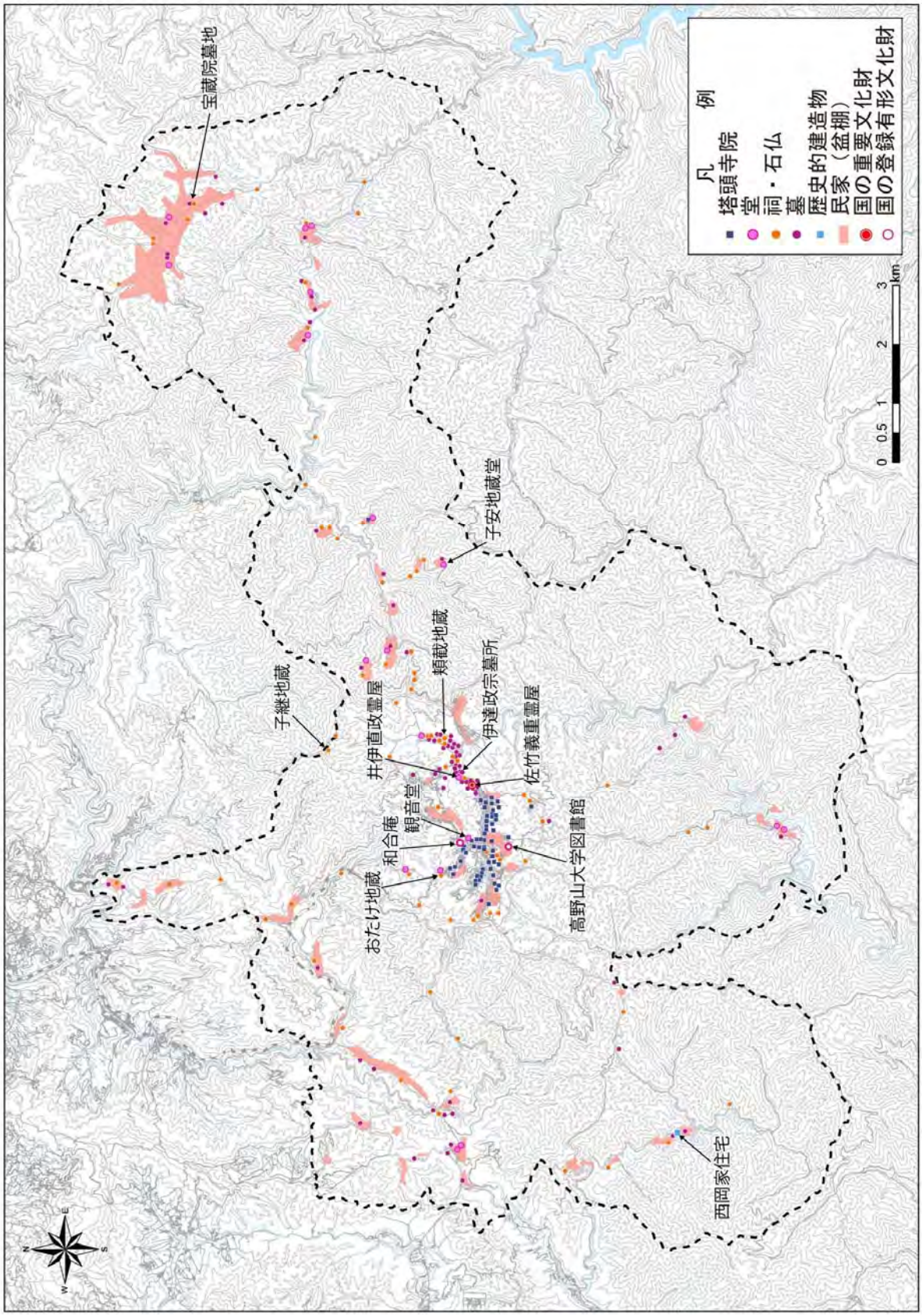


民家庭先での盆棚への供花（相ノ浦地区）



民家庭先での盆棚への供花（筒香地区）

このように、高野町では各所で宗教的性格を持つ歴史的建造物を対象とした高野槙の供花が日常的にみられる。特に石仏、祠、墓石は至る所にみられるため、それ自体が高野槙の供花の対象とならない高野山大学図書館のような公共建築物等においても、その周辺で高野槙が供花される様子が日常的にみられる。そのため、高野町では歴史的建造物と供花された高野槙が一体となった景観が各所でみられ、供花される高野槙が高野町独特の景観を形成する重要な要素となっている。



地図：基盤地図情報（国土地理院発行）を使用

■高野槙供花を行う対象建造物の分布

②高野槙の栽培と販売

高野町では供花される高野槙の栽培と販売は、現在主要産業の一つとなっている。栽培が盛んとなったのは、昭和 30 年代以降であるが、その歴史は古い。

高野山周辺の山林には、多くの高野槙が保護・育成されてきた。周辺集落では、安永 4 年（1775）の「摩尼庄五か村檜皮・槙皮剥定書請書」、寛延 2 年（1749）の「御用木江戸廻送につき覚」に槙丸太を御用木として出した記録があるように槙皮（まきはだ）や木材のために高野槙を管理し、古くから副産物として供花用の槙の枝も扱っていたと考えられる。その後、参詣者増加による需要増もあり、高野槙の栽培は次第に供花用主体に変化していった。供花用の槙の栽培については、明治 8 年（1875）の「東富貴村産物書上帳」に「槙花　弐段」、明治 11 年（1878）の「東富貴村産物書上帳」に「槙新花　三駄　二円也」とあることから、明治時代初期には、高野山の周辺集落において供花用の槙が栽培され商品として扱われていたことがわかる。

参詣者への販売についても、奥之院の入口である一の橋での槙の販売について明治 42 年（1909）に金剛峯寺の販売許可が下りている。その後、南海高野線の営業開始や戦後の社会状況の安定による参詣者の増加により、槙の需要が増加し、周辺の集落での槙栽培畑の増加、高野山上の参詣道沿いでの販売店舗が増加している。



高野槙畑（苗畑）（相ノ浦地区）



高野槙栽培林（大滝地区）

参詣者の増加による高野槙販売数の増加により、周辺集落では、昭和 30 年代頃から杉や檜の栽培林や民家の周辺に広がる平地の畑を高野槙畑に変え、供花用の枝や苗の栽培を盛んに行なっている。

高野槙は、大別すると苗、小枝を束ねた枝、高野槙の先端を伐採した芯の三種で販売される。



槙の芯　　槙の枝　　槙の苗

苗木は 7 年程育てると 30cm ほどに成長し販売できるようになる。枝を販売できるようになるには、少なくとも 10 年は必要で、20 年程すると本格的に枝の出荷が可能になる。20 年以上かけて成長した高野槙から良質な枝を多く採取するために木の先端を切り、脇から多くの枝がでてくるよう調整する。他の枝についても同様に頭を切り落とすことで枝分かれを促し、

多くの枝を採取できるような処置をする。芯は、高野槙の先端を伐採して採取するため、1 本の木から数本しか採取できない貴重なものである。出荷は、正月前、春の彼岸前、盆前、秋の彼岸前の年 4 回を中心として年間を通じて行なわれる。

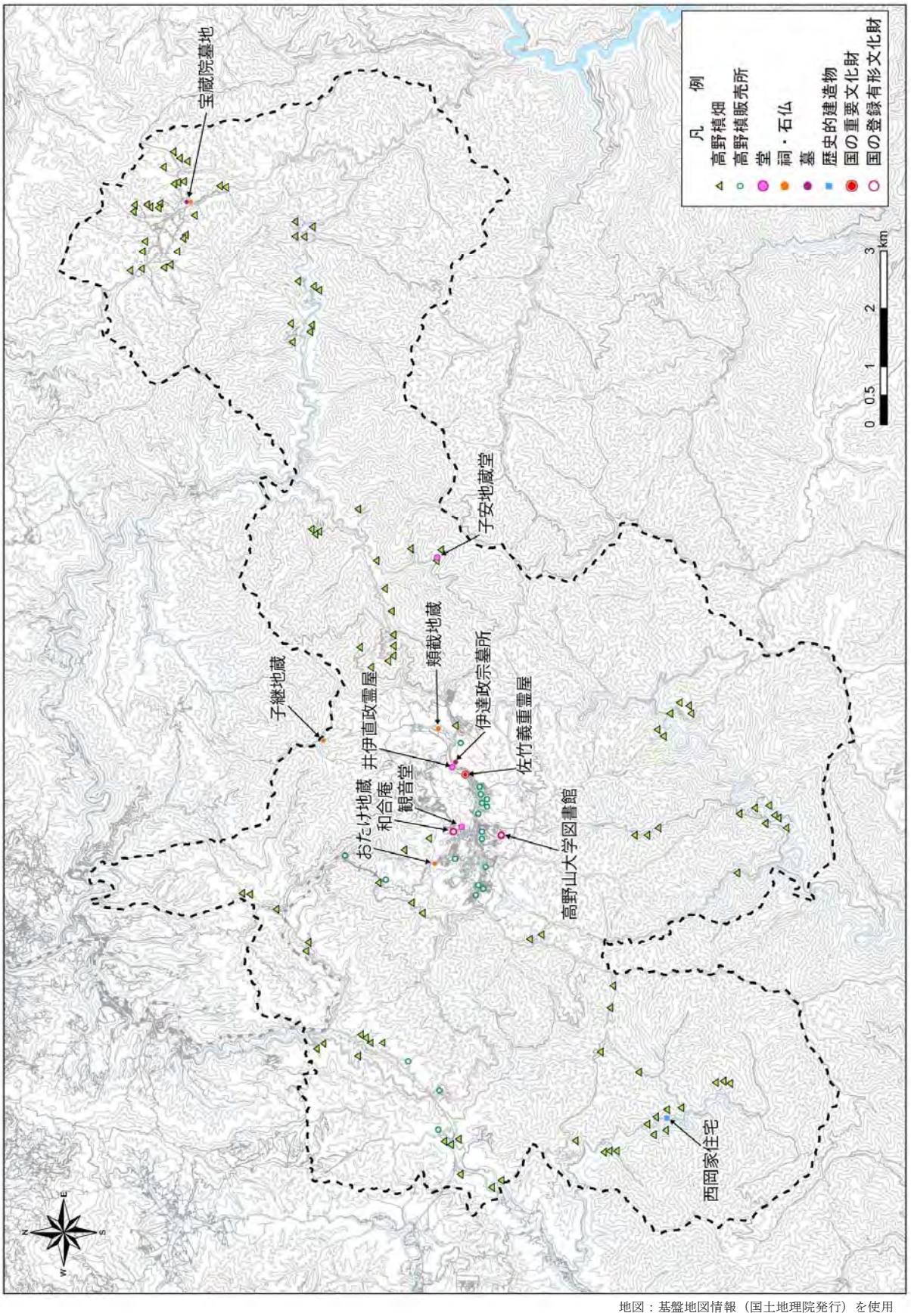
参詣者への販売は様々であるが、販売の中心は点在する屋台と花屋である。特に屋台は、塔頭寺院や町石等の歴史的建造物が連なる町石道で多くみられ、歴史的建造物と高野槙を買い求める参詣者の姿が一体となって高野参詣道の独特な景観を形成している。また、近年では土産物屋や花坂のやきもち店、無人販売所の他、南海高野線の高野山駅や極楽橋駅でも販売されるようになっており、徒歩、車、バス、電車のいずれの参詣ルートを選択しても高野槙を土産として購入し持ち帰ることが可能となっている。



屋台での高野槙販売（金剛峯寺前）



屋台での高野槙販売（町石道）



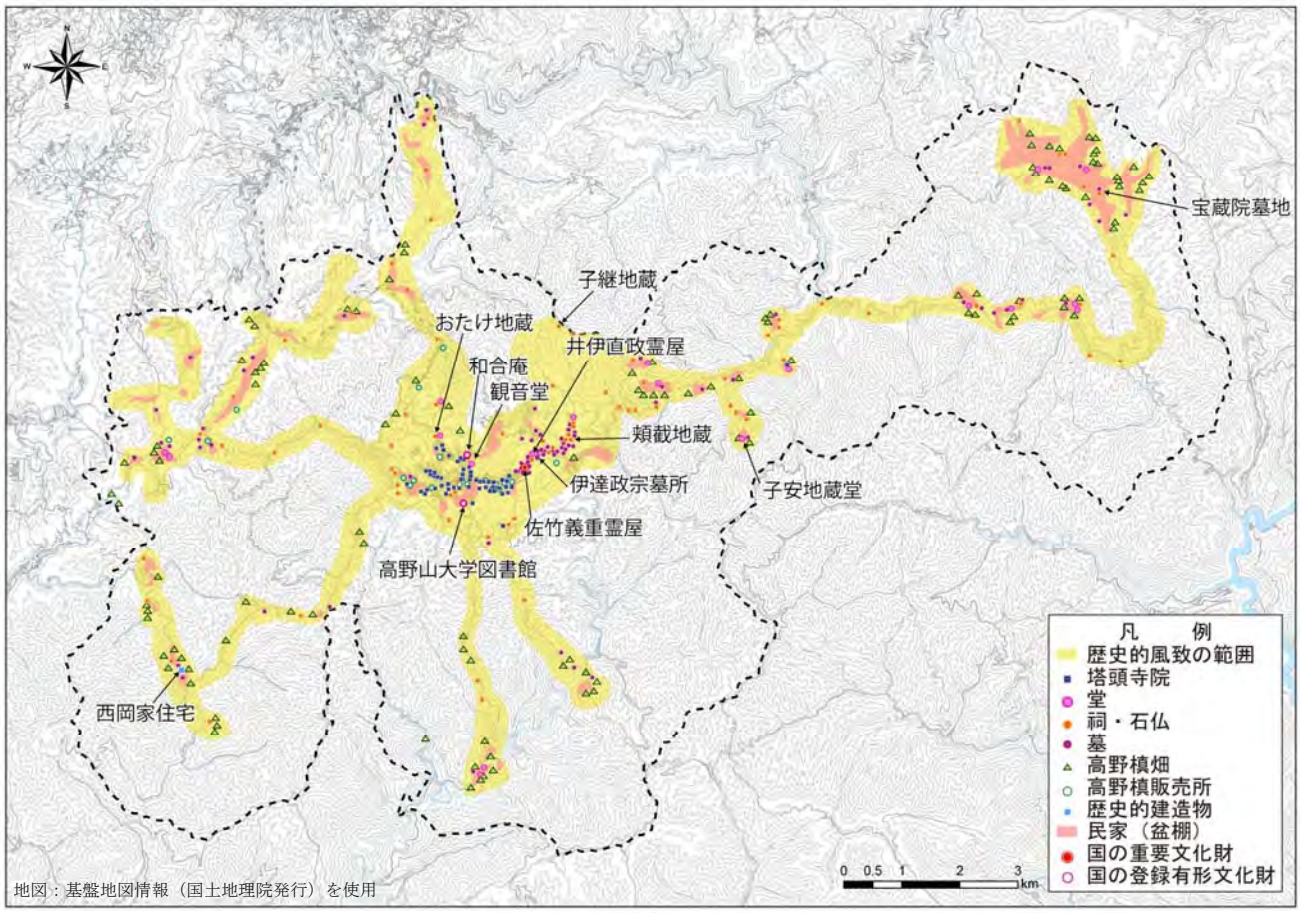
地図：基盤地図情報（国土地理院発行）を使用

■高野槙の栽培・販売地点の分布

（4）まとめ

高野槙は、その名からも想像されるように、高野山と非常に関係の深い植物である。高野山では、古来より高野槙を霊木として保護育成するとともに、『紀伊続風土記』に「その材大なるは堂宇或いは器物に作りて一山の用を足し、其木皮を剝ぎて縄になひ、諸国に運送して利益を得ること大なり」とあるように実用樹種としても重視してきた。現在では、材や皮の需要は減少したが、仏花としての需要が増大し、高野槙は主要産業の一つに成長し町の経済を支えている。

高野山を中心とした地域では、多くの歴史的建造物や石造物に高野槙が供花され、集落の周辺には整った槙畑が広がり、町中では参詣土産に高野槙を求める参詣者と販売する住民の姿がみられる。このような真言密教の根本道場である高野山にみられる歴史的建造物と高野槙の関係により形成された独特の景観は、後世に伝えていくべき歴史的風致である。



■高野槙供花にみる歴史的風致の範囲

コラム

○高野槙の記念植樹

昭和 52 年（1977）4 月 18 日昭和天皇、皇后両陛下が高野山に行幸啓でお出ましになられた。

その際、史跡金剛峯寺境内にある金剛峯寺経蔵（重要文化財）の前と高野山霊宝館（国登録有形文化財）敷地内に総本山金剛峯寺により、記念植樹として高野槙が植えられた。

この高野槙は総本山金剛峯寺により手厚く管理され、植樹後 40 年たった今でもしっかりと根づき樹高 15m 以上の大木に育っている。



経蔵前記念植樹の高野槙

○お印

お印は、皇族や華族の方々が身の回りの品に記名の代わりにつける印章のことで、誕生した際や結婚した際につけられる。

平成 18 年(2006)9 月 12 日に秋篠宮文仁親王殿下が誕生した男のお子さまに名前を授けられる「命名の儀」が行われ、御名を悠仁（ひさひと）と御命名になった。その際、悠仁親王殿下の「お印」を「高野槙」とされた。

お印の「高野槙」は日本固有の常緑高木で幹が直立し、高さ 30m～40mになることから、秋篠宮同妃両殿下が「大きく、まっすぐに育ってほしい」と決められた。



霊宝館敷地内記念植樹の高野槙



高野槙と記念植樹説明板

３．宗祖降誕会（青葉まつり）にみる歴史的風致

（１）はじめに

「青葉まつり」とは、弘法大師空海の誕生日を祝う祭礼である。空海の正確な誕生日は伝えられていないが、6 月 15 日は真言宗八祖の一人である不空三蔵が亡くなった日であり、弘法大師は彼の生まれ変わりであるという伝承からこの日が誕生日とされている。

祭りは「宗祖降誕会（しゅうそごうたんえ）」と呼ばれる宗教儀礼を原型としている。江戸時代中期の史料である『金剛峯寺年中行事』に「宗祖降誕会」と記述があり、少なくとも 18 世紀半ばには執行されていた。その後、弘法大師空海の誕生を祝うために儀礼を軸としてそれを囲むように各種行事が発案・追加されていった。その結果、新緑が薫る 6 月という季節を考慮して「青葉まつり」と呼ばれるようになった。そのため現在では「宗祖降誕会・青葉まつり」と両者を含めて表記されるほか、総称として「青葉まつり」と表記・呼称されることも多い。

新聞記事で現在の祭りに沿った形で「青葉まつり」が登場するのが昭和 13 年(1938)である。『大阪朝日新聞』(6 月 9 日発行）には予告記事として次のような文章が掲載されている。「来る十五日のいはゆる“青葉まつり”宗祖弘法大師降誕日を前に高野山では弘法大師降誕奉賛会を組織し一山あげて盛大な奉讃行事を行ふべく着々準備を進めてゐる（後略)」

このように昭和 13 年（1938）には高野山で 6 月 15 日に行われる催しが「いわゆる青葉まつり 宗祖弘法大師降誕日」として認知されており、高野山の「青葉まつり」が一般的な呼称として地域内外に普及していく様子がみてとれる。



青葉まつり

（2）建造物等

高野山は、「金剛峯寺」をはじめとして、その子院である塔頭寺院、堂、宗教的な意味を備える石造物に加えて商家や民家等も軒を連ねる独特の景観を形成している。塔頭寺院は境内において近世の建物が多く残る。また商店や町家等の建造物についても大正時代から戦前に建てられたものが数多い。



塔頭寺院前に商家が軒を連ねるまちなみ

【金剛峯寺】

金剛峯寺は、明治 2 年（1869）に青巌寺と興山寺を合併して総本山金剛峯寺としたもので、高野山上及び宗派を統括する寺院である。境内の東半部である旧青巌寺の範囲には、江戸時代に建立された大主殿、経蔵、鐘楼、真然堂、護摩堂、山門、会下門、かご塀があり、これらは「金剛峯寺」として和歌山県指定有形文化財となっている。西半部の旧興山寺の範囲には、真松庵、奥殿、新書院、阿字観道場、別殿等が建ち並ぶ。

大主殿は、文久 2 年（1862）建立の桁行 53.9m、梁間 39.5m、入母屋造檜皮葺の大きな建物である。正面中央に入母屋造妻入の玄関、右手に台所、左手に書院と奥書院等の建物が連結し構成される。屋根の上には、火災に供えた天水桶が置かれる。



金剛峯寺大主殿

経蔵は、延宝 7 年（1679）建立の桁行四間、梁間三間、入母屋造檜皮葺の土蔵である。

鐘楼は、元治元年（1864）建立の桁行三間、梁間二間、入母屋造檜皮葺の袴（はかまごし）腰付鐘楼である。



金剛峯寺鐘楼

真然堂は、寛永 17 年（1640）建立の桁行三間、梁間三間の宝形造檜皮葺である。

護摩堂は、文久 3 年（1863）建立の桁行三間、梁間三間、方形造檜皮葺である。

山門は、文久 2 年（1862）建立の切妻造檜皮葺の四脚門である。



金剛峯寺山門

会下門は、19 世紀中頃の建立とされる桁行 19.5m、梁間 5.2m、入母屋造檜皮葺の長屋門である。

かご塀は、文久 3 年（1863）に再建され、延長約 94m、高さ約 3m、幅約 1.7mの塀であり、両外面の壁土の内部は空洞で籠のようになる。特に寺域西側は、築地塀となっており、文禄 2 年（1593）に築かれたものと推定される。

真松庵は、昭和 40 年（1965）、高野山開創千百五十年大法会の際に松下幸之助氏（松下電器産業株式会社創業者、和歌山市出身）の寄進によって建てられた茶室である。

奥殿は、昭和 8 年（1933）弘法大師入定千百年御遠忌大法会の記念に建てられた桁行 11 間 3 尺、梁間 6 間 4 尺、入母屋造銅板葺で正面に切妻造の玄関を設ける。

新書院は、昭和 32 年（1957）に神戸市から移築したもので桁行 8 間 2 尺、梁間 4 間 2 尺、入母屋造銅板葺である。

阿字観道場は、昭和 42 年（1967）建設の切妻造銅板葺である。

別殿は、昭和 9 年（1934）建設の入母屋造銅板葺である。



金剛峯寺奥殿

【高野山大師教会（こうやさんだいしきょうかい）】

高野山大師教会は、大正 4 年（1915）に高野山開創千百年記念大法会の記念事業の一環で建立された大講堂であり、集団得度、阿字観、宗教舞踊等が行なわれる金剛峯寺の講堂的な役割を果たしている。桁行 19.3m梁間 30.3m、入母屋造銅板葺で正面に一間の唐破風（からはふ）の向拝を設ける。



高野山大師教会

【小堀南岳堂（こぼりなんがくどう）】

創業は、文化年間（1804-1818）にさかのぼる商店であり、屋号は「木綿文（もめんぶん）」であり、元々は僧侶のための法衣・衣料店であった。現在では書籍等を販売している。接続して建てられている主屋と土蔵が通りに面する。主屋は、桁行 14.5m、梁間 13.5mの平入切妻造瓦葺の２階建である。

土蔵は、桁行 3.6m、梁間 6.3mの切妻造瓦葺の２階建である。金剛峯寺にも近く、店の前を走る高野山町石道を花御堂御渡が練り歩くため、まつりの当日は多くの参詣者で賑わう。



小堀南岳堂

【三宝院】

寺伝によると、三宝院は空海の母が慈尊院村に建立したものを、後に現在地に移したとされる。寛延７年（1754）建立の四脚門は、切妻造檜皮葺きの山門（寺院の門）である。



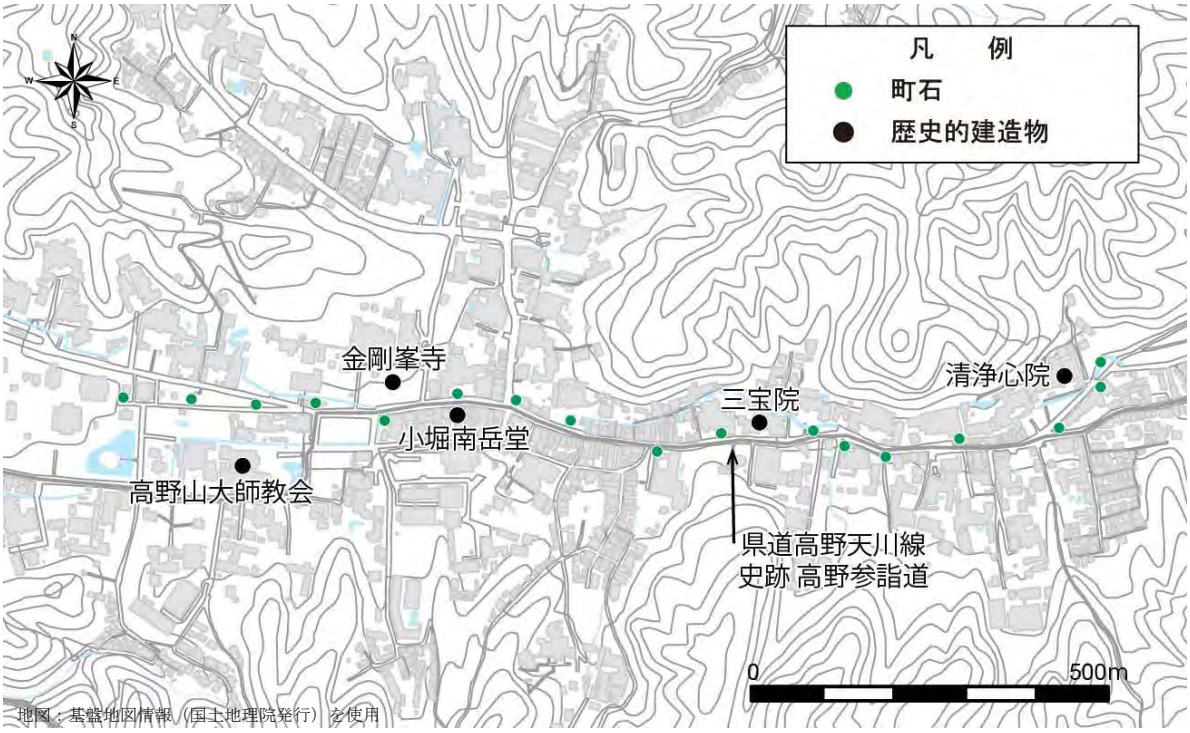
三宝院四脚門

【清浄心院（しょうじょうしんいん）】

庫裏は、万延元年（1860）の建立。高野山では、格式の高い塔頭寺院に用いられる客殿と台所を一つの大屋根に収める一体型の型式である。入母屋造檜皮葺の大きな建物で、正面中央に入母屋造妻入の玄関、右手に台所、左手に客殿等が連結し構成され、台所の屋根には煙出しを設ける。



清浄心院



■建造物配置図

（3）宗祖降誕会（青葉まつり）の歴史と流れ

「宗祖降誕会」は大正 7 年（1918）には現在と同じ大師教会で執り行われている。また「青葉まつり」は屋内外にわたって多彩な催しが行われるが、一例を挙げれば現在金剛峯寺で行われる書道展は大正 9 年（1920）、献茶・献花式は昭和 33 年（1958）から続いている。

屋外の催しであるお堂や寺院前広場等で行われる各種芸能の奉納は大正 10 年（1921）には始められている。参詣者は並べられた椅子に座り、自然豊かな高野山の空気を吸いながら、歴史的建造物と一体となった舞踊などを鑑賞する。奉納される芸能の音色は遠くにも響きわたる。

まつりは多様な要素で構成されているため、高野山上に所在する様々な建造物が舞台になる。そのなかでも、まつりの主要行事と認識されている「花御堂渡御」は、奥之院参道入り口である一の橋を起点とし、高野山を東西に走る主要道路である県道高野天川線を通り金剛峯寺前広場を終点とする。一の橋は史跡「金剛峯寺境内」であり、また高野天川線は史跡「高野参詣道」である。担い手たちはそれぞれの衣裳に着替えた上で一の橋に集まり、まつりの始まりを待つ。



花御堂を準備する担い手たち



花御堂渡御と参詣者

「花御堂渡御」とは、弘法大師空海の幼少期の尊称である「稚児大師」像（木製稚児大師坐像）を安置した花御堂を中心として、その前後約 1 ㎞にわたって大師音頭の踊り手や鼓笛隊など総勢約 1,000～1,500 名を編成し、奥之院参道の入り口である一の橋から金剛峯寺前広場までの約 2㎞ にわたり「大師音頭」等を鳴り響かせながら踊り歩く行列である。

「花御堂渡御」は、昭和 13 年（1938）の『大阪朝日新聞』（6 月 9 日発行）に「花御堂に稚児大師を安置して稚児たちが山内を練り廻り」とあり、また翌 14 年（1939）6 月 11 日の同紙には「高野山では昨年計画した花祭りの御堂を購入して地方山内の篤信者より稚児を募り稚児祭りとともに（青葉まつり）を挙行する」とあることから、少なくとも昭和 13 年（1938）には行われていた。

担い手は子どもから大人まで幅広く、辺りは緊張感と共に賑わいに包まれる。周囲には奥の院の大杉林（和歌山県指定天然記念物）が林立し、庶民から大名家まで多くの墓所が建立されている。

「花御堂渡御」は大師音頭行列の踊り手たちと共に県道高野天川線を西に向かって、清浄心院、三宝院、小堀南岳堂等の歴史的建造物前を通りながら、ゆっくりと

練り歩く。県道は史跡「高野参詣道」であり、その両脇には塔頭寺院、土産物店、飲食店等の商家が入り混じった聖俗混交の寺内町の景観を形成している。商家前には地域住民が善意で設置した木製の椅子が置かれ、腰を降ろして行列を眺める参詣者も多い。中には渡御を眺めながら、渡御の移動に並行して歩いている者もいる。聖俗が入り混じったまちなみの中を練り歩く花御堂渡御はまつりの担い手、参詣者と一体となり、仏都・寺内町としての高野山の特徴的な景観を形成している。

終点である金剛峯寺前広場では多くの参詣者が集まる。彼らが心待ちにするのは花御堂渡御が到着した後に同寺院から出てくる金剛峯寺管長（座主）の一行である。一行は地域住民が扮する四天王、傘持ちのほか、雅楽隊に先導される。美しい雅楽の響き、付き人が天蓋（てんがい）として掲げる朱色の和傘と共に姿を現す管長の存在は、祭りを一層荘厳にする。



金剛峯寺管長の登場

昭和初期には既に行われていた「花御堂渡御」だが、当時は稚児大師像を安置した花御堂を児童が町中を引き廻すだけであり、現在みられるような大師音頭に合わせて踊り歩くという要素はなかった。

この「花御堂渡御」が大きな変化を遂げるのが昭和 26 年（1951）である。昭和 26 年（1951）当日、高野町東小田原、西小田原両町内会の青年有志が「高野絵巻行列」と題した仮装行列で花御堂の後に続いた。担い手は東西小田原町内会のなかでも、僧侶をのぞいた町民、つまり在家住民であった。この出来事は、それまでの祭りが、僧侶を主な担い手とした宗教儀礼としての性格が強かったため、在家住民が祭りに参加したことが当時としては衝撃的で、これを契機として翌 27 年（1952）には弁天通り町内会、南小田原町内会が、現在の花御堂渡御行列の出発点である一の橋から大門まで約 2.5km にわたって大師音頭の踊り歩きを始めた。



昭和 26 年（1951）の仮装行列



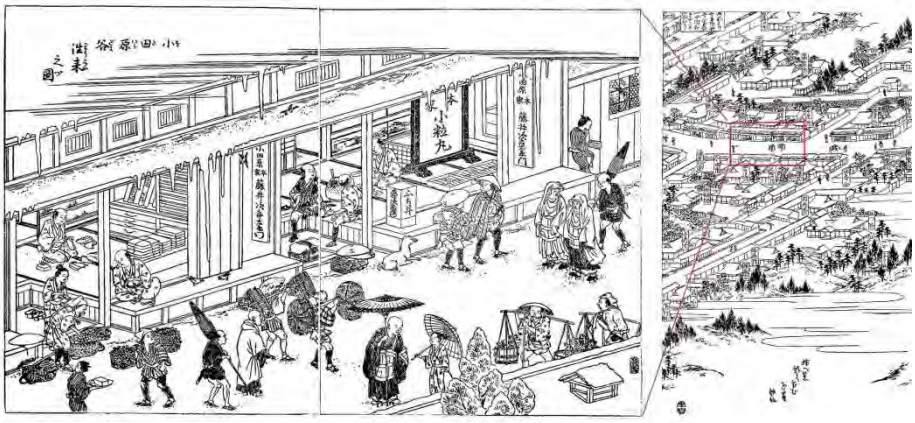
昭和 27 年（1952）の大師音頭

その後は各町内会が持ち回りとなって在家住民による花御堂渡御の大師音頭行列は恒例化していった。つまり「宗祖降誕会（青葉まつり）」において在家住民が大師音頭を踊り歩くという行為が祭りの主要行事を担うようになり、担い手も僧侶だけでなく在家住民が多くを占めるようになった。このような歴史があって、現在において祭りは「町民による祭り」と呼ばれる。

以上のような祭りの歴史的変遷は、江戸時代における高野山の歴史と密接な関係をもつ。

現在の高野山では、明治時代の廃仏毀釈（はいぶつきしゃく）等に伴い統廃合された結果 117 の寺院が存在し、その間を縫うように飲食店や土産物店など商家を交えた景観で構成されている。しかし、このような聖俗空間としての高野山は、全体史からみれば約 100 年程度でしかない。江戸時代には既に商家が存在していたことが古絵図等からわかるが、経師や数珠屋など寺院生活と関連するものに限定されており、現在よりも規模・内容ともに小さく在家住民の数も遥かに少なかった。

近代の出来事の中でも明治 5 年（1872）における女人禁制の解除は、女性の居住許可に伴い家族単位での移住を増加させた。結果として高野山は、僧侶と在家、寺院と商家で構成される聖俗混交の寺内町が形成されていった。「宗祖降誕会（青葉まつり）」とその要素である「花御堂渡御」は、このような近代期における高野山の社会的背景を如実に現わしている。



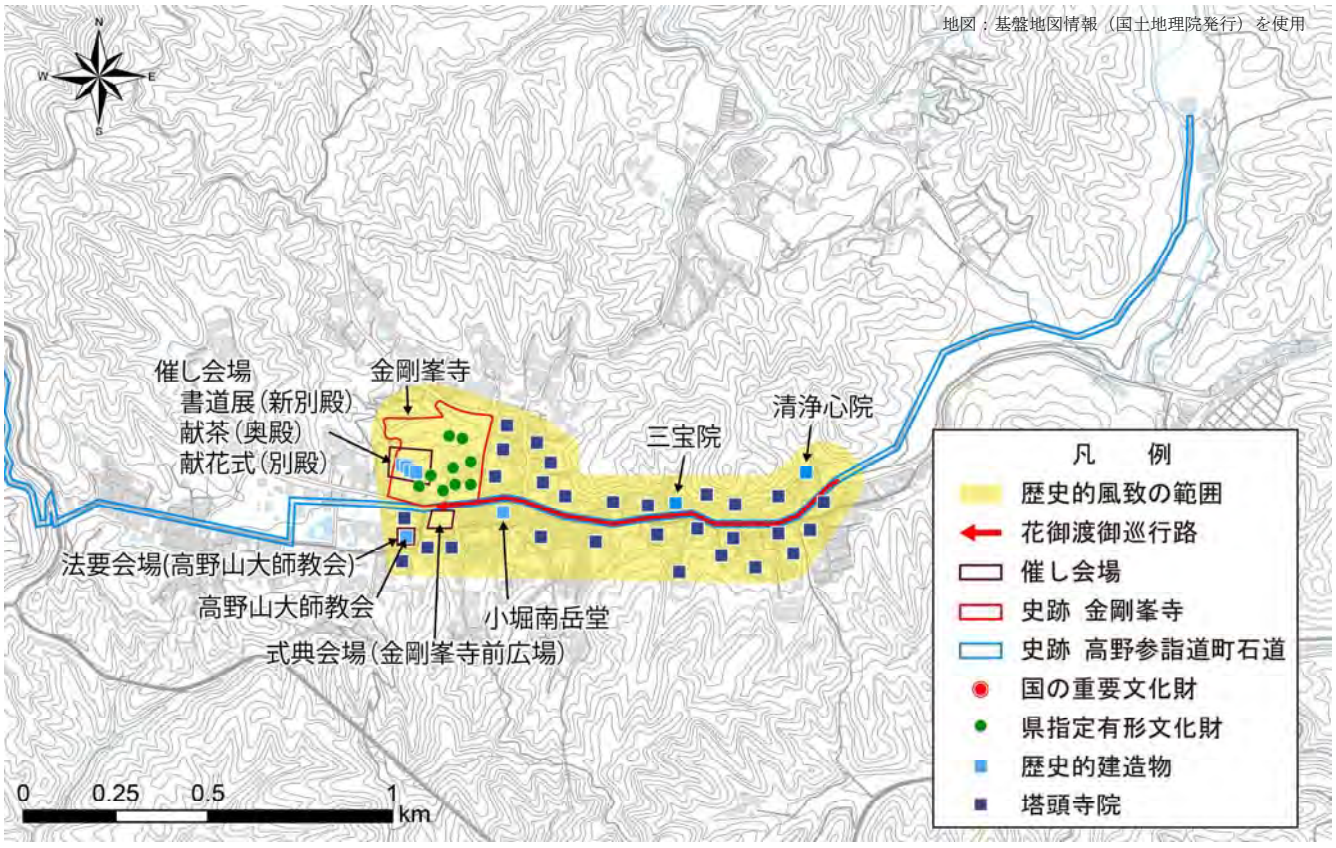
紀伊国名所図会　巻之四（江戸時代後期）を一部加工

（4）まとめ

青葉まつりは、昭和 39 年（1964）には各町内会持ち回りから連合町内会に管轄が移り、金剛峯寺、行政、観光協会などの積極的な参入のもとに組織化が図られてきた。

地域住民による祭りへの関与はそれぞれの役割に振り分けられた形で実現されている。

「宗祖降誕会」という宗教儀礼を軸とする「青葉まつり」は、聖俗を問わない地域住民が一体となって、まさに高野山全体を挙げて行われる祝祭・祭礼である。「宗祖降誕会（青葉まつり）」を構成する多様な内容は屋内外関係なくそれぞれが歴史を有している。そのなかでも町中を練り歩く「花御堂渡御」は、高野山の歴史を表す貴重な民俗であると共に、その聖俗一体となった視聴覚的な景観は、後世に伝えるべき貴重な歴史的風致である。



■宗祖降誕会（青葉まつり）にみる歴史的風致の範囲

コラム

〇青葉祭り前夜祭

昭和 62 年（1987）以来、祭りの前夜である 6 月 14 日には「奉燈行列」と呼ばれる「高野ねぶた」の高野山内曳き回しがある。「高野ねぶた」とは、高野町商工会青年部等の地域住民が祭りに向けて寝食を惜しんで制作し、毎年様式が変更される。出発地点である通称「ねぶた小屋」に担い手たちが結集し、景気付けに御神酒等が振る舞われる。小屋から搬出されたねぶたに僧侶が読経を唱え、その後に曳き回しが始まる。金剛峯寺前広場では地元小中学生等による和太鼓演奏が催され、威勢のよい演奏は、奉燈行列を活気づけ、響きを添える。ねぶたは数時間かけて高野山内を巡り終わった後、翌日の花御堂渡御に向けてねぶた小屋に納められる。





ねぶた小屋でのねぶた製作



ねぶたの法要



ねぶたの出発



ねぶたの曳き回し



金剛峯寺前広場での和太鼓演奏

４．燈明信仰にみる歴史的風致

（１）はじめに

歴史的に見れば、盆時期に奥之院燈籠堂で執行される儀礼には８月 14 日の「万燈会」と 15 日の「盂蘭盆会」があり、両方とも長久 5 年（1044）には行われていることが『高野山旧記』からわかる。更に天保 10 年（1839）の『紀伊続風土記』には、永承３年（1048）から寄進された燈明を供養する儀礼が行われたことが記されている。

このように高野山において燈火は、歴史的・宗教的に重要な意味を備えている。燈火を扱う代表的な祭礼としては「ろうそく祭り」が挙げられる。

本祭りは、毎年８月 13 日に行われ、奥之院全域に約 10 万本のろうそくが地域住民、参詣者の手で灯される。また同日午後８時から僧侶を中心とした宗教儀礼である「萬燈供養会」が奥之院燈籠堂で執り行われる。近年ではこれら二つの要素を含めたうえで「萬燈供養会（ろうそく祭り）」と呼ばれる。

同日、町中には高野山の東西を結ぶ主要道路の両端に地域住民やボランティアによって置燈籠が設置される他、塔頭寺院・商家が「献灯」と書かれた白い提灯を軒先に飾りつける。祭りの目的は、先祖をはじめ奥之院に眠る全ての御霊を供養するというものと説明される。

つまり高野山の町中にまで及ぶ燈明を供養する儀礼は中世にまで起源が求められ、近世以降には諸大名による墓所建立が盛んとなる。さらに近代以降には一般

庶民の墓石、墓所建立が飛躍的に増加し、特に奥之院は燈籠やろうそくが絶えず灯される燈明を用いた供養の場所という意味を備えることになった。そして燈明を主要な信仰対象として多くの人々が引き継いできた歴史の中で生まれたのが「ろうそく祭り」である。



奥之院燈籠堂で燈火を用いて執り行われる儀礼の様子

（2）建造物等

金剛峯寺の境内地である高野山は全域が宗教上の聖地であるが、なかでも弘法大師空海御廟が所在する奥之院は特別な聖域とされる。

「ろうそく祭り」の舞台の一つである奥之院には、弘法大師御廟へ続く参道約 2km にわたって一般庶民から諸大名に至るまで 20 万基以上の墓石が建ち並ぶ。奥之院は弘法大師御廟から北側の山林を含む広大な範囲が史跡「金剛峯寺境内」に指定されており、史跡上には「金剛峯寺奥院経蔵」、「松平秀康及び同母霊屋」等の重要文化財、「崇源夫人五輪石塔」等の和歌山県指定文化財などが数多く存在している。奥之院には現在もなお墓所の建立が続けられており、盆や彼岸時期には線香やろうそくを持った自家の墓を参る多くの人々が訪れる。

【金剛峯寺奥院経蔵】（国の重要文化財）

本経蔵は、慶長 4 年（1599）に木食応其上人の勧めにより、石田三成が母の菩提を弔うために建立したものである。方三間宝形造檜皮葺、内部には一切経 6,285 帖を納めるための八角形の回転式輪蔵が造られている。



金剛峯寺奥院経蔵

【松平秀康及び同母霊屋】（国の重要文化財）

本霊屋は、徳川家康の子である福井藩初代藩主の松平秀康を祀る霊屋と秀康の母を祀る霊屋の二棟で構成される。秀康霊屋は、慶長 12 年（1607）に建立され、入母屋造で正面に唐破風を設ける。母の霊屋は、慶長 9 年（1604）の建立で切妻造妻入であり、どちらも福井県の笏谷石による石造の霊屋である。それぞれの霊屋の正面には、石鳥居を設け、周囲には四十九院の刻銘のある玉垣を配する。



松平秀康及び同母霊屋

【崇源夫人五輪石塔】（和歌山県指定史跡）

崇源夫人五輪石塔は、江戸幕府 2 代将軍秀忠夫人のお江の追善のため、子の徳川忠長が寛永 4 年（1627）に建立したものである。花崗岩製の五輪塔で、総高 6.6ｍの巨大な石塔で、高野山で最も大きい石塔であることから「一番石塔」とも呼ばれる。石塔の前方に石鳥居、周囲に四十九院の刻銘のある玉垣を配している。



崇源夫人五輪石塔

【普賢院】

寺伝によると、大治年間（1126-1131）に覚法親王が高野山に参詣された際に念持仏（ねんじぶつ）の普賢菩薩像を与えたことに始まるとされる。境内の西面に大正時代（1912-1925）建立の入母屋造本瓦型銅板葺、一間一戸の楼門である。南面に重要文化財の普賢院四脚門（しきゃくもん）がある。平唐門の四脚門で檜皮葺である。現在の普賢院四脚門は、江戸時代に金剛峯寺の裏山に祀られていた東照宮の四脚門を明治 25 年（1892）に移築した。



普賢院四脚門

【虎屋薬局】（高野町景観重要建造物）

虎屋薬局は、明治 24 年（1891）に建てられた高野山で最も古い商家である。現在でも薬局として薬類が販売されている。

木造切妻造の２階建であり、正面上部の両側には漆喰による袖壁が造られる。西側には明治 34 年（1901）に建てられた土蔵があり、内部から直接出入りできるように連結されている。



虎屋薬局

（３）歴史と活動

①「燈明信仰」の起源

＜空海による萬燈萬華会の実践＞

『高野春秋編年輯録』「天長 9（832）年 8 月 22 日」の項に、空海が「萬燈萬華会」（以下、萬燈会）を執行したとの記述がある。さらに『性霊集』には、同年同月日において空海による「高野山萬燈会の願文」の「誓願（せいがん）」が述べられている。内容は、空海が唐の青龍寺の恵果和尚から受け継いだ、人々の幸せを祈り願うという密教思想を平易に述べたもので、「萬燈」、「光」という用語からもみえるように、高野山ではその草創期から「火」によって人々の安寧・平和を願うという思想が存在していた。

＜弘法大師御廟と燈籠堂への燈火と燈明信仰の成立＞

空海の入定後、弟子たちによって御廟前に燈火が献上されたことが『高野山奥院荒廃記』に記されている。大師の跡を継いだ代々の金剛峯寺管長（座主）にとって御廟を守護することは最大の責務であった。また『奥院勤行之事（おくいんごんぎょうのこと）』には、承和 3 年（836）に弟子たちが御廟前に現在の燈籠堂を建立して献火等を献じたとある。「献火等」については現在でも真言密教の儀礼において燈火は不可分な関係にあり、礼堂建立と同時に燈火が捧げられた。ここに現在における奥之院御廟および燈籠堂に

おける燈明信仰の起源が見出せる。

このような「弘法大師入定信仰・奥之院・燈籠堂」と「燈明」という関係を端的に物語るのが「祈親燈」と「白河燈」という二つの燈火である。祈親上人定誉は、長和 5 年（1016）に奥之院御廟前で高野山復興を念じて苔を集めて石火を試みた。その火が高野山復興の尽力者という事実とともに「祈親燈」と名付けられるようになった。また「白河燈」における白河上皇は、寛治 2 年（1088）を最初に 3 回の高野参詣を果たし、根本大塔の再建などに尽力した。

現在の燈籠堂内には無数の燈籠が祀られている。そのなかで祈親燈と白河燈は「消えずの火」と呼ばれている。この二つのともしびは途絶えることがないよう中世以来、大切に人々の手によって守られてきた。また、祈親燈は「貧女の一燈」、「お照の一灯」とも呼ばれている。これはお照という女性が、育ての両親の菩提を弔うために自分の髪の毛を切って売り、小さな燈籠を奉納したという物語が語り継がれているためである。



祈親燈



白河燈

つまり両燈の共通点は、高野山復興に尽力した人物であるという点である。それを受けて御廟に捧げられた二つの燈明に物語性が付与され、高野山・弘法大師入定信仰を唱導する燈明信仰として定着、拡大していった。

＜奥之院における先祖供養としての燈明信仰と墓所建立のはじまり＞

高野山草創期から「火」が宗教思想と実践において欠かせないものであったという事実は、現在の高野山で行われる先祖供養を目的とした盆行事の迎え火に繋がる。

『奥院燈篭帳』において、文明 3 年（1481）から延宝 4 年（1676）の 196 年間にわたる燈籠寄進が記録され、合計 1,156 基の燈籠が先祖供養を目的に寄進されていることから、15 世紀には既に奥之院を中心とした先祖供養が行われていた。さらに近世期には全国各地の大名家による墓所建立が盛んとなった。

＜奥之院全域への先祖供養と墓所建立の一般化＞

現在の奥之院には 20 万基とも言われる墓石が存在している。しかし一般庶民による墓所建立の飛躍的な増加は、制限が解除された明治時代以降である。

昭和 19 年(1944)9 月 3 日には南海鉄道株式会社の高野線の紀伊細川駅の西側で、「お盆で高野山参りの乗客で満員電車 2 両が脱線」したことが『朝日新聞』に掲載されている。

また、昭和 28 年（1953）刊行の『高野山』には「昔は、奥之院の浄域には、身分のあるもののほかは墓石の建立は許されなかった（中略）それが明治になって自由になるとともに、急に築造のことが盛んになり、新しい墓石が年々増加して、全く数えることもできないほど、押し合いへし合い、建立されていき（後略)」とある。

昭和 40 年（1965）の高野山の情景を記した『高野ごよみ』には、当時の盆時期における奥之院の様子が「八月十一日夕刻、奥の院へ仏様をお迎えに行く。蝋燭を立て、蕗の葉の上に生野菜を供え、提灯の火に仏さまの魂を宿ってもらう。夕ぐれ迫るお墓に、蝋燭の火がゆらぎ、寺々の定紋のついた提灯が、参道を行き交う盆迎えの日の奥の院は、何かにぎやかで、華やかに淋しい風景」とある。

増加する先祖墓所は、昭和 40 年（1965）には既に相当数が建立されており、盆時期には多くの人々が先祖供養のために高野山、奥之院を訪れていた。

現在においても 8 月の高野山は、奥之院へ先祖墓所を建立した多くの人々が日本全国から集まり、奥之院参道に隣接する町石道沿いには様々な都道府県ナンバーの車が見られる。また奥之院のそれぞれの場所で、ろうそくや線香に火を灯して先祖を供養する人々の姿を見かける。

このような盆時期の奥之院における先祖供養は、各個々人で行われつつも奥之院全域で面的に見られるものであり、「ろうそく祭り」の風景と強く重なる。



奥之院の無縁仏



奥之院の墓地

＜入定信仰・燈明信仰・先祖供養から「ろうそく祭り」へ＞

弘法大師入定信仰を起源とし、奥之院における燈明信仰、先祖供養と繋がっていく高野山における燈明信仰は、現在では「ろうそく祭り」という形で引き継がれている。

「ろうそく祭り」で扱われる 10 万本のろうそくの種火となるのが先述した「祈親燈」である。祭り当日、担い手と僧侶が燈籠堂に赴き、提灯のろうそくに「祈親燈」の「火」を灯す。「火」は大切に運ばれ、祭りの起点である一の橋に設置される。これにより「ろうそく祭り」の「火」は全て「入定信仰」「燈明信仰」「先祖供養」という歴史的に繋がり、ゆっくりと奥之院全域に広がっていく。



町中に設置された置燈籠（個人蔵）

奥之院には燈籠堂のほかにも金剛峯寺奥院経蔵、松平秀康及び同母霊屋、崇源夫人五輪石塔等、多くの文化財が点在し、それぞれの墓所や墓石がろうそくの明かりで映し出される。祭りで伝えられる「先祖をはじめ奥の院に眠る総ての御霊（みたま）を供養する」という説明からも「ろうそく祭り」において先祖供養への篤（あつ）い思いが表れている。多くの参詣者が集まる当日は、宿坊で宿泊する参詣者も多く、歩いているだけでもそれぞれの宿坊から賑やかな声が聞こえてくる。町中に設置される置燈籠は、四脚門を擁する普賢院や虎屋薬局など歴史的な建造物と一体となって夏の高野山を彩る。

以上のように、8 月 13 日において執行される「ろうそく祭り」は、聖俗問わない多くの担い手たちによって成し遂げられる。

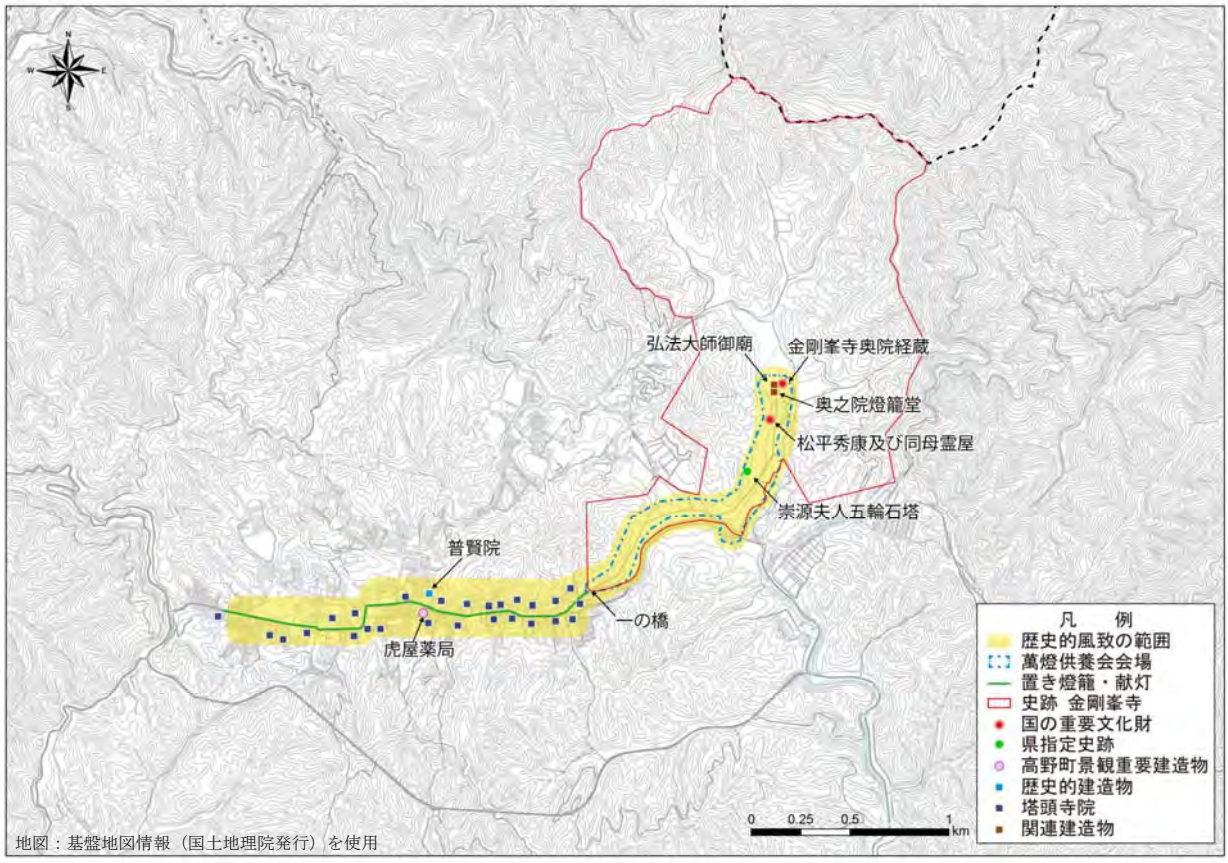




萬燈供養会（ろうそく祭り）

（4）まとめ

燈明信仰は、燈火を用いた宗教儀礼である「萬燈会」に始まり、「先祖供養」として発展し、庶民にまで浸透していくことで、「火」にまつわる信仰の歴史が受け継がれ、現在、「ろうそく祭り」という形で山上を幻想的に彩っている。人々の手による灯火（とうか）を用いて照らし出される景観は、今や奥之院だけでなくまちなかにも拡がりを見せており、高野山の特色を顕著に表す歴史的風致である。



■燈明信仰にみる歴史的風致の範囲

５．明神社秋季大祭にみる歴史的風致

（１）はじめに

明神社は、御社または山王院とも呼ばれることもある神社で、空海が高野山を開創するにあたり、この地を長く鎮護し、自身をそこへと導いた神々への感謝と仏法守護の祈りを込め高野山の聖地の一つである壇上伽藍に勧請した。この神社を中心として、高野山上全体で行われる祭りが明神社秋季大祭である。

この祭りは、正応４年（1291）の『金剛峯寺年中行事帳』の二月の条に「十六日、御社御祭、建久九戊午年十一月十六日始之」、十一月の条に「十六日、山王院御祭如二月、毎月理趣三昧如二月（中略）建久九戊午年十一月十六日始之」とあり、また天保 10 年（1839）の『紀伊続風土記』の年中行事の二月の条に「十六日　御社神事」、十一月の条に「十六日　山王院御祭如二月」と記されていることから、建久 9 年(1198)の 11 月 16 日に開始され、江戸時代頃までは 2 月 16 日と 11 月 16 日の年 2 回行われていたようである。昭和 7 年（1932）に年 1 回 10 月 16 日に行われるように決まって以降は、法楽・餅投・神輿渡御の行われる現在と同様の祭りが行われている。昭和 39 年(1964)からは各地区町内会の代表により構成される高野山奉賛会が祭りの主催となり、高野山上の住民が中心となり祭りを行っている。

祭りの姿は、女人禁制解禁後の高野山上の山内居住の開始に伴い徐々に変化している点もあるが、真言密教の聖地ならではの歴史的な祭礼の姿が伝承されている。



明神社秋季大祭での餅投（場所：壇上伽藍）

（2）建造物等

①明神社の建造物

祭りの最初の法要が行なわれ、神輿の出発地となっている明神社は、壇上伽藍の西端にあり、一段高い壇上に本殿（山王院本殿）、その前面に拝殿（山王院拝殿）、鐘楼が建つ。本殿は、弘仁 10 年（819）に空海が山麓天野の里より丹生都比売明神と高野明神を勧請して高野山の鎮守とされたもので、後に十二王子・百二十番神を祀る総社が勧請された。

【金剛峯寺山王院本殿】（国の重要文化財）

本殿は、大永元年（1521）の火災の翌年の大永 2 年（1522）に再建されたものである。丹生明神社、高野明神社、総社の 3 棟で構成され、その前面に鳥居と透堀が配される。丹生明神社と高野明神社はともに一間社春日造、檜皮葺であり、総社は、三間社流見世棚造、檜皮葺である。鳥居は、木造明神鳥居、透塀は、左右各折曲り八間、銅板葺である。



山王院本殿

【金剛峯寺山王院拝殿】

拝殿は、天保 14 年（1843）の大火に焼失した後、弘化 2 年（1845）に壇上伽藍の諸堂と共に再建されたものである。桁行九間、梁間三間の入母屋造、檜皮葺であり、両妻に向拝を設けている。鎮守社三社の拝殿であるとともに、旧暦の 5 月 3 日には、密教に関する問答を繰り広げる山王院竪精の論議の行われる場所であり、毎月 16 日には山内の僧侶による法楽もおこなわれている。



山王院拝殿

【金剛峯寺山王院鐘楼】

壇上伽藍の諸堂が焼失した天保 14 年（1843）の大火で焼失し、山王院拝殿とともに弘化 2 年（1845）頃に再建されたとされる。桁行三間、梁間三間、入母屋造檜皮葺の袴腰付鐘楼である。なお、梵鐘は天文 14 年（1545）の鋳造である。



山王院鐘楼

②壇上伽藍の堂塔

明神社があり、祭りの主要な行事の一つである根本大塔での餅投が行なわれるのが、壇上伽藍と呼ばれる地区である。壇上伽藍は、空海が高野山を開創するにあたり最初に開かれた場所で、根本大塔や金堂等の多くの堂塔が並び立っており、地区全体が、「金剛峯寺境内（伽藍地区）」として史跡に指定されている。

壇上伽藍の堂塔は、大火により幾度も焼失し、その都度創建時の姿に再建を繰り返し、現在は、西塔、孔雀堂、准胝堂、御影堂、六角経蔵、金堂、根本大塔、鐘楼、愛染堂、大会堂、三昧堂、金剛峯寺不動堂、東塔など多くの歴史的建造物である堂塔が建ち並び、壇上伽藍の景観が形成されている。明神社を出発した神輿は、壇上伽藍の堂塔の間を練り歩き、寺内町の各所に進んでいく。



壇上伽藍の建物配置

【西塔】

西塔は、仁和 3 年（887）に真然によって創建されたとされる。その後何度も火災による焼失と再建を繰り返し、現在の建物は天保 5 年（1834）に再建された。壇上伽藍の諸堂がことごとく焼失した天保 14 年（1843）の大火を免れた数少ない建物である。方五間の大型多宝塔で、屋根は本瓦型銅板葺である。



西塔

【准胝堂】

准胝堂は、創建当初の壇上伽藍にあった食堂に安置されていた准胝観音を祀るため、天録 4 年（973）に創建されたとされる。現在の建物は、明治 16 年（1883）に再建されたもので、桁行三間、梁間三間の入母屋造檜皮葺であり、正面に一間の向拝を設ける。



准胝堂

【御影堂】

御影堂は、空海の持仏堂として建立され、後に真如親王（しんにょしんのう）の「弘法大師御影像」を祀ったことから御影堂と呼ばれるようになったとされる。天保14年(1843)の大火で焼失した後、弘化4年(1847)に再建された。

桁行五間、梁間五間の宝形造檜皮葺で、正面に一間の向拝が設けられる。堂の背後には、数々の霊宝や貴重な文書を保管する土蔵造りの御影堂宝庫がある。信仰上のみでなく宝物庫としても重要な役割を果たす建物である。



御影堂

【六角経蔵】

六角経蔵は、美福門院（びふくもんいん）が鳥羽上皇（とばじょうこう）の菩提を弔うため平治元年（1159）に創建したとされ、その後、焼失と再建を繰り返してきた。現在の建物は昭和9年（1934）に再建されたものである。経蔵は、六角二重の塔で、屋根は銅板葺。躯体は鉄筋コンクリート造で、一重部分のみ外側を校倉風に木材で覆う。経蔵維持のため荒川庄（あらかわのしょう）が寄進されたことから、荒川（あらかわ）経蔵とも呼ばれる。



六角経蔵

【金堂】

弘仁10年（819）の創建とされ、焼失と再建を繰り返してきた。現在の建物は昭和元年（1926）の焼失後、昭和7年（1932）に再建されたものである。桁行九間、梁間七間の入母屋造、本瓦型銅瓦葺であり、正面と背面に三間の向拝を設ける。躯体は鉄骨鉄筋コンクリート造であるが檜材で化粧をし、木造建築の外観を持ち、耐震性・耐火性を備えた構造となっている。



金堂

【根本大塔】

空海、真然と二代を費やし弘仁 7 年（816）から仁和 3 年（887）に創建したとされる。以後、焼失と再建を繰り返し、現在の建物は昭和 12 年（1937）に再建されたものである。方五間の大型多宝塔で、屋根は本瓦型銅板葺。主要躯体部分は鉄骨鉄筋コンクリート造であるが、裳階（もこし）部分は木造である。同時期に再建された金堂や六角経蔵同様、耐火構造と伝統的な木造建築の外観を併せ持つ構造となっている。



根本大塔

【鐘楼】

鐘楼は、昭和 32 年（1957）に寄進によって建立された。方三間の吹き放ち鐘楼であり、入母屋造本瓦型銅瓦葺である。

この鐘楼には、天文 16 年（1547）に完成した直径約 2mの高野四郎（こうやしろう）と呼ばれる日本で 4 番目に大きい鐘があり、午前 4 時、午後 1 時、午後 5 時、午後 9 時、午後 11 時の 5 回、高野山上に時刻を知らせている。



鐘楼

【愛染堂】

愛染堂は、建武元年（1334）に後醍醐（ごだいご）天皇の勅命により創建されたとされる。以後焼失と再建を繰り返し、現在の建物は嘉永元年（1848）に再建されたものである。桁行三間、梁間三間の入母屋造檜皮葺であり、正面に一間の向拝を設ける。



愛染堂

【大会堂】

大会堂は、安元元年（1175）に鳥羽法皇後追善のために建立され、治承元年（1177）に西行（さいぎょう）によって壇上伽藍に移された。以後、焼失と再建を繰り返し、現在の建物は嘉永元年（1848）に再建されたものである。桁行五間、梁間五間の入母屋造檜皮葺であり、正面に一間の向拝を設ける。



大会堂

【三昧堂】

三昧堂は、高野山第 6 代座主の斉高（さいこう）により延長 7 年（929）に建立され、後に壇上伽藍に移された。現在の建物は、嘉永元年（1848）に再建されたもので桁行三間、梁間三間の宝形造檜皮葺である。



三昧堂

【金剛峯寺不動堂】（国宝）

不動堂は、建久 8 年（1197）に行勝（ぎょうしょう）上人が創建したとされる。かつては、不動坂口から高野山上に入ったところに存在した一心院（いっしんいん）にあったものが明治 41 年（1908）に壇上伽藍に移された。桁行三間、梁間四間の主屋と右側に桁行一間、梁間三間、左側に桁行一間、梁間四間の脇間が付属した平面であり、屋根は入母屋造檜皮葺であるが、屋根の四隅全てが異なる形となる特異な形式となっている。



金剛峯寺不動堂

③寺内町の建造物

高野山上には、壇上伽藍や総本山金剛峯寺の他に 117 の塔頭寺院、堂や墓所、商店や民家、公共建築物等など数多くの歴史的建造物が建ち並ぶ。117 の塔頭寺院は、ほとんどが近代以前の建造物であり、商店や民家、公共建築物等の建造物についても大正時代から戦前に建てられたものが数多く存在し、その周囲には古絵図に描かれたものからほとんど変わらない古くからの道路や水路がみられる。これらの歴史的建造物やその周囲の道路・水路によって寺内町のまちなみが形成される。壇上伽藍を出た神輿は、各歴史的建造物の間を練り歩きながら、寺内町のまちなみをくまなく巡る。



塔頭寺院前を流れる水路

【勧学院（かんがくいん）】

勧学院は、弘安 4 年（1281）に鎌倉幕府執権の北条時宗（ほうじょうときむね）によって創建された塔頭寺院である。現在の建物は、文化 10 年（1813）に再建された。境内には、正面三間の両脇に間口二間の張り出しがつく「三棟造り」と呼ばれる特異な構造の本堂、入母屋造檜皮葺の鐘楼（しょうろう）が建ち、境内を



勧学院

築地塀で囲み、南に切妻造檜皮葺の四脚門である正門を置き、その前面には石垣護岸の水路が流れ、木橋が架かる。

【金剛三昧院】

金剛三昧院は、北条政子が源頼朝の菩提を弔うために建暦元年（1211）に創建したとされる塔頭寺院である。境内には、金剛三昧院楼門〔文政 8 年(1825)、一間一戸楼門、入母屋造〕、金剛三昧院多宝塔〔貞応 2 年（1223)、方三間多宝塔、檜皮葺、国宝〕、金剛三昧院経蔵〔貞応 2 年頃、桁行二間梁間二間校倉、寄棟造檜皮葺、重要文化財〕、金剛三昧院客殿及び台所〔江戸時代初期、桁行 34.3m梁間 18.9m、入母屋造檜皮葺、重要文化財〕金剛三昧院四所明神本殿〔天文 21 年（1552)、一間春日造檜皮葺、重要文化財〕など多くの歴史的建造物が残り、境内地は、金剛峯寺境内（金剛三昧院地区）として史跡指定されている。



金剛三昧院

【徳川家霊台】

徳川家霊台は、寛永 20 年（1643）に創建された。重要文化財である家康霊屋と秀忠霊屋の他、徳川家霊台四脚門（四脚門、切妻造銅板葺）の歴史的建造物がある。家康霊屋と秀忠霊屋は、ともに桁行三間、梁間三間の宝形造銅瓦葺で正面に一間の唐破風の向拝を設ける。敷地は金剛峯寺境内（徳川家霊台地区）として史跡に指定されている。



徳川家霊台

【高野山霊宝館】（国の登録有形文化財）

高野山霊宝館は、大正 9 年（1920）に高野山開創千百年記念大法会の記念事業の一環で建てられた。高野山上の各塔頭寺院所蔵の宝物を収集保存する施設であるため、建物の構造は、防火と防湿のため木造であるが内外全てが漆喰塗である。屋根は切妻造、宝形造、入母屋造と各棟で異なる形状をとり外観に変化を持たせている。



高野山霊宝館

このほか、鉄筋コンクリート造の収蔵施設である大正 9 年（1920）に建てられた小宝蔵と昭和 38 年（1963）に建てられた大宝蔵、大正 10 年（1921）に建てられた木造平屋建の迎賓館がある。

【橋本警察署高野幹部交番（はしもとけいさつしょこうやかんぶこうばん）】（国の登録有形文化財）

橋本警察署高野幹部交番は、大正 10 年（1921）に建てられた公共建築物である。木造 2 階建で、屋根は切妻造金属板葺で正面に千鳥破風（ちどりはふ）を配している。高野山の歴史的景観に配慮し、全体的に社寺風の外観となっている。



橋本警察署高野幹部交番

（3）明神社秋季大祭の流れ

10 月 16 日、午前中に勧学院内に保管されてある神輿を壇上伽藍に運び、明神社本殿前に 3 基の神輿が置かれる。正午になると、拝殿で金剛峯寺僧侶による法要が行なわれ、その後、根本大塔で金剛峯寺の僧侶による餅投が行なわれる。壇上伽藍の中心で行なわれる餅投は、高野山上の住民のみならず、参詣者も多く参加し、非常に賑わいをみせる。餅投が終わると、僧侶、高野山奉賛会員、中高生が、神輿が置かれている本殿前に集まり、神事として般若心経の読経を行なう。読経を終えると、3 基の神輿は中高生等に担がれて明神社を出発し、壇上伽藍の諸堂の間を練り歩いた後、それぞれ異なる順路をとり、高野山上の寺内町をくまなく巡る。



明神社前に置かれる神輿



根本大塔での餅投



明神社前での法要



壇上伽藍を渡御する神輿

神輿は、太鼓を叩きながら、塔頭寺院、商店や町家、公共建築物等の寺内町を構成する歴史的建造物の間を練り歩き、高野山上の全ての塔頭寺院に渡御する。各塔頭寺院につくと山門から境内に入り、「ワッショイ」の掛け声とともに神輿を揉み（上下に揺さぶる）、明神社御守護札を配る。神輿が立ち寄る場所は、各塔頭寺院のみでなく、順路上の商店や町家、公共建築物も含まれ、寺内町の各所で神輿が揉まれる。



まちなかを渡御する神輿



塔頭寺院前で揉まれる神輿

3 基の神輿のうち 1 基目の神輿は、明神社を出て、壇上伽藍の六角経蔵、金堂、中門の脇を進み壇上伽藍の南側に出て西へ進み総門である大門に向かう。大門から折り返し、東に向かって進み、石垣護岸の水路を伴う道を進みながら、道の両脇に並ぶ塔頭寺院に立ち寄り、高野山霊宝館を通り、金剛三昧院へ向かい、その後壇上伽藍へ戻る。2 基目の神輿は明神社を出て、山王院鐘楼、西塔、孔雀堂、准胝堂、御影堂など諸堂の脇を進み、壇上伽藍の北側に出て、金剛峯寺前を通り、東へ進み奥之院の入口である一の橋に向かう。一の橋から道の両脇に並ぶ全ての塔頭寺院に立ち寄りながら西へ進み壇上伽藍に戻る。この順路は多くの商店も建ち並び、それらの商店の前でも神輿が揉まれる光景がみられる。

3 基目の神輿は、明神社を出て、壇上伽藍を東へ進み、西塔、孔雀堂、准胝堂、御影堂、金堂、根本大塔、鐘楼、愛染堂、大会堂、不動堂、三昧堂の脇を通り、蛇腹路（じゃばらみち）から壇上伽藍の東側に出て、総本山である金剛峯寺に向かう。金剛峯寺前に着くと、石垣護岸の水路に架かる橋を渡り、南の山門から境内に入り神輿を揉んだ後、東の会下門から境内を出る。金剛峯寺を出た神輿は西に進み「五の室影向大明神社（ごのむろみかげだいみょうじんしゃ）」に渡御する。その後、神輿は東に折り返し、徳川家霊台、橋本警察署高野幹部交番の前を通りながら、道沿いの塔頭寺院に立ち寄り壇上伽藍に戻る。五の室影向大明神社では、壇上伽藍の明神社の神輿の渡御をもって祭りが始まり、僧侶と氏子による般若心経の読経と餅投が行なわれる。

3 基の神輿は、このように高野山上の寺内町をくまなくまわった後、再び壇上伽藍の明神社に戻り秋季大祭が終了する。



金剛峯寺に巡行する神輿

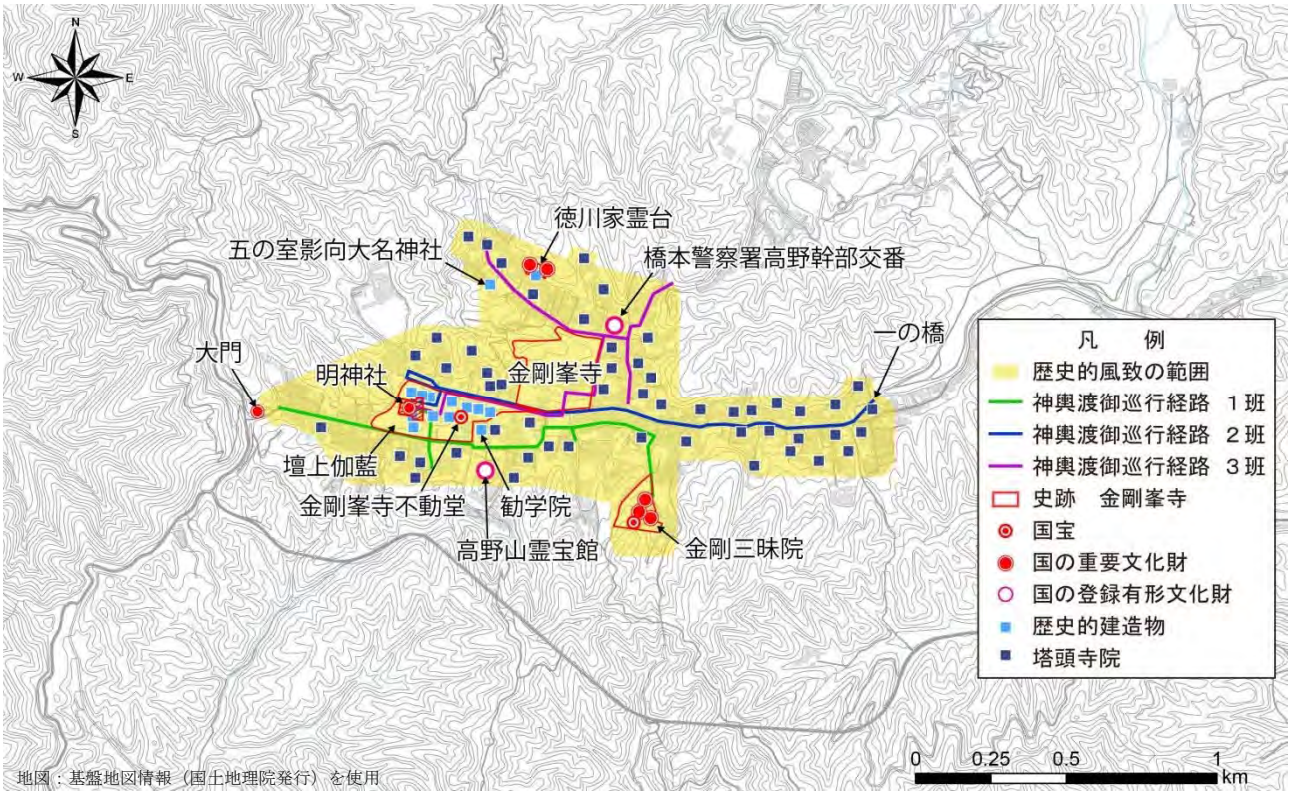


影向大明神社へ渡御する神輿

（4）まとめ

明神社秋季大祭は、かつては高野山の僧侶のみにより行なわれていたが、現在では僧侶、高野山上の在家住民が結集して行なう祭礼となっている。一般的にみられる祭りのように宮司の祝詞でなく、僧侶の法要により開始される祭りの姿は真言密教の根本道場である高野山の歴史的な祭りの姿を伝えるものである。

明神社秋季大祭は、高野山上の主要な歴史的建造物を網羅するように神輿が渡御するもので、真言密教の根本道場として現在まで守り伝えてきた社寺とそこで修行する僧侶、生活する住民が一体となって行なわれる祭礼は、後世に伝えていくべきものであり、高野町を代表する歴史的風致である。



■明神社秋季大祭にみる歴史的風致の範囲

６．高野山を取り巻く周辺集落の祭礼にみる歴史的風致

はじめに

高野山の歴史は、弘仁 7 年（816）に、空海が金剛峯寺を草創したときからはじまり、戦国・安土桃山時代の荘園領主としての難局を乗り切って大寺院となった。江戸時代の高野山金剛峯寺は、2 万 1,300 石の幕府公認の寺領を持つ、日本最大級の正統派寺院として確固たる地位を保持し、全国的にゆかりのある地域が高野山の寺院経営を援助していた。高野山の周辺集落においても、近接する寺領であることから、食料・物資・建材を調達する上でも非常に重要な場所にあり、年貢を納め支えてきた。

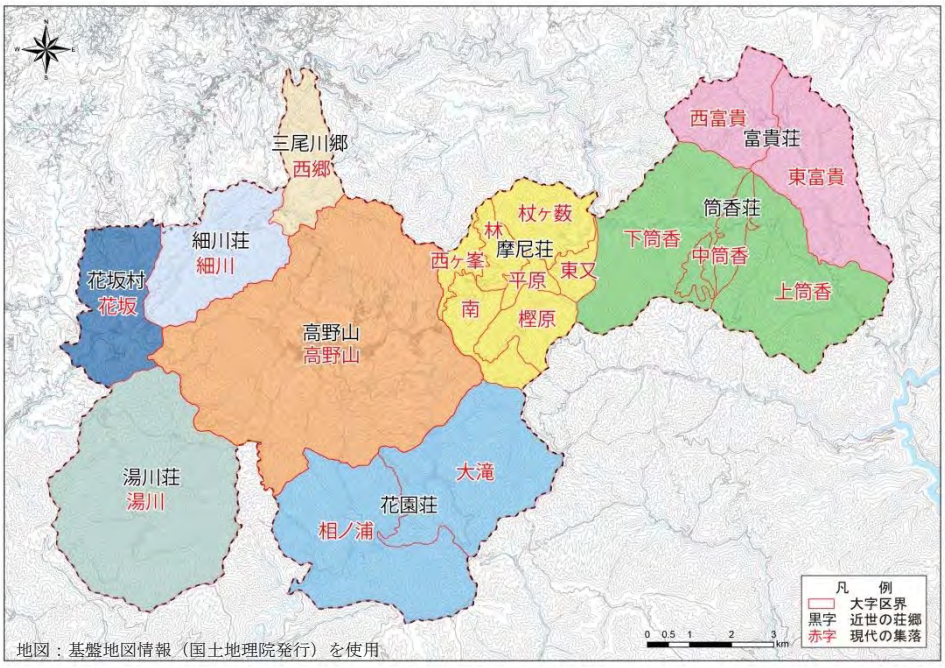
明治・大正・昭和時代を経て町村制の施行に伴い一つの町となったとき、行政区画として村名は、町内の大字名にそのまま継続されたが、高野山との密接なつながりは全く変わっていない。

周辺集落の概要を荘郷（江戸時代以前の村落のこと）により説明すると、全て高野山寺領であり、高野山より東の旧域には、杖ヶ薮村（小名に東又村）・樫原村・平原村・林村・南村・西ヶ峰村（以上、現在の高野町）・東宿村・西宿村・市平村（以上、現在の九度山町）の 9 か村からなる摩尼荘があった。

さらに東に、上筒香村・中筒香村・下筒香村の 3 か村からなる筒香荘、東富貴村・西富貴村の 2 か村からなる富貴荘があった。

南の旧域には、相ノ浦村・大滝村（以上、現在の高野町）・古向村・臼谷村・有中村・中腰村・峰村・梁瀬村・滝谷村・北寺村・新村・中南村・久木村（以上現在のかつらぎ町）の 13 か村からなる花園荘があった。

西南の旧域には、上湯川村と下湯川村の 2 か村（現在の湯川）からなる湯川荘、西の旧域には、花坂村、東北の旧域には、細川村の細川荘、北の旧域には、西郷村（現在の高野町）・東郷村（現在の九度山町）の 2 か村からなる三尾川郷があった。



■高野山と周辺集落の昔と現在の地域割（高野町域）

祭礼はこれら村落の範囲で行われ、そこに住む人によって守り伝えられている（表－1 参照）。どの村落も高野山の寺領であった。また、高野山との歴史的な関係から、高野山の鎮守の神である丹生明神（丹生都比売大神）を祀っている村落も多い。ここでは高野山と歴史的に関係の深い周辺集落で守り伝えられた祭礼のうち、富貴の秋祭りと、花坂の鬼もみと、細川の傘鉾祭りと、筒香の秋祭りを紹介する。

富貴の秋祭りが行われる富貴では、田畑を作り高野山に年貢を納めてきた。また橋本（和歌山県橋本市）や、五條（奈良県五條市）から物資が届き、高野山や熊野へと運ばれる、交通の要衝でもあった。江戸時代から宿場町、市場町として賑わってきたところである。

花坂の鬼もみが行われる花坂は、耕地が高野町の中では広く、農作物を運んで高野山を支えてきた集落の一つである。また、明治時代頃までは高野参詣の人々が花坂を通ることが多く、茶屋が建ち並び、宿場町としても賑わっていたところでもある。

細川の傘鉾祭りが行われる細川の中心には八坂神社があり、空海が病気除け、農耕の神として素戔嗚尊をお祀りしたのがはじまりであるといわれている。

筒香の秋祭りは、餅投が行われ、高野山を取り巻く周辺集落の秋祭りの特徴が表れている祭りである。天保 10 年（1839）の『紀伊続風土記』には、「筒は狭き義、香は河の下略にて狭谷の義なるへし」と記されていることや、筒香の「藤白峰」は、「上筒香・東富貴・和州坂本村三村の界にて高峰なり、水呑峰、又石堂峰、又子粒嶽ともいふ」と伝えられ、現在の筒香の東、奈良県境の山と考えられる。この峰は天野（和歌山県伊都郡かつらぎ町）の丹生都比売神社の旧鎮座地とされる。



富貴の景観



花坂の景観



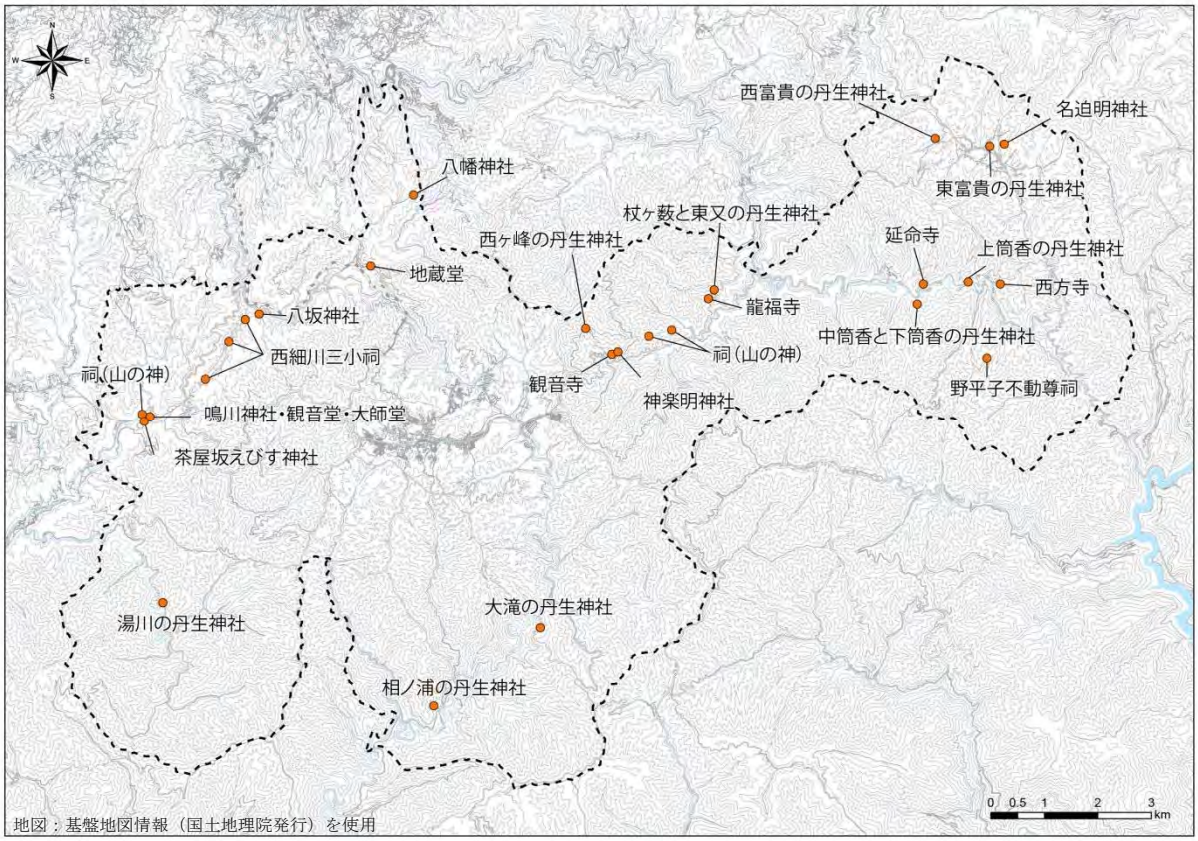
細川の景観



筒香の景観

近世の荘郷	現代の大字	名称	開催日	内容	関係社寺
富貴荘	西富貴・東富貴	秋祭り	10月第2週の休日	神輿・渡御・だんじり	東・西富貴の丹生神社 名迫明神社・瀧明神
花坂村	花坂	鬼もみ	8月15日	神事・神輿・太鼓奉納・風の御祈祷	鳴川神社・観音堂・大師堂
		的射	1月7日	神事（まとい）	鳴川神社
		えびす祭り	1月9日	神事・餅投	茶屋坂えびす神社
		初午	旧初午	厄除祈祷・御詠歌・餅投	観音堂
		山の神	11月7日	神事・餅投	祠
細川荘	東細川・西細川	傘鉾祭り	8月16日	神事・神楽奉納	八坂神社
		本祭（七夕祭り）	7月7日	神輿、渡御	八坂神社
		秋祭り	11月7日	神楽奉納・神事・餅投	八坂神社
		小祠回り	正月	小祠お供え	西細川三小祠
筒香荘	上筒香	秋祭り	10月第2週の体育の日	神事・餅投	丹生神社
	中・下筒香	秋祭り	10月第2週の体育の日	神事・餅投	丹生神社
	上筒香	大般若	1月10日	礼拝	西方寺
	上筒香	野平子祭	10月28日	神事・餅投	野平子不動尊祠
	中筒香	正月2日のおこない	1月2日	法要	延命寺
摩尼荘	西ヶ峰・南・林・平原・樫原	秋祭り	10月13日	神事・餅投	丹生神社
	杖ヶ藪	初午	新暦初午	法要・餅投	龍福寺
		御影供	旧3月21日	巡拝・法要・餅投	大師祠・龍福寺
	杖ヶ藪・東又	おこない・的打ち	1月3日	神事（まとい）	丹生神社
	南	初午	旧暦初午	法要・餅投	観音寺
		山の神	11月7日	神事・餅投	祠
	林	林地区カグラ	10月13日	神事	神楽明神社
		山の神	11月7日	神事・餅投・直会	祠
花園荘	相ノ浦	秋祭り	10月17日	神事・神子舞	丹生神社
	大滝	秋祭り	10月第2日曜日	神事・餅投	丹生神社
三尾川郷	西郷	地蔵堂祭	8月24日	地蔵盆礼拝	地蔵堂
		秋祭り	10月15日に近い土曜日・日曜日	神事	八幡神社
湯川荘	湯川	秋祭り	10月15日に近い日曜日	神事・餅投	丹生神社

表－1　高野山周辺集落で行われている祭礼



■高野山周辺集落で行われている祭礼位置図

６－1　富貴の秋祭り

(1)祭りの由来

東富貴・西富貴（江戸時代の富貴荘）の代表的な祭りは、毎年 10 月第 2 週の休日に行われる秋祭りである。もとは 10 月 10 日宵宮、11 日本祭、12 日後宴の 3 日間の行事で、宵宮・後宴にはだんじりが、本祭には神輿とだんじりが出ていたが、現在は少子高齢化により規模が縮小され、1 日だけの祭りになっている。東富貴・西富貴から神輿とだんじりが巡行し、それらが合流し、西富貴の丹生神社と東富貴の丹生神社で神事が行われる。

富貴村の名迫家に伝わる文書「丹生八幡両宮神輿造立記」によると、東富貴の神輿は、享保 11 年(1726)に造られたことが記され、西富貴の神輿は寛政 2 年(1790) 8 月に祭礼のために新たに造られたことが記されている。また御旅所を東富貴村の瀧下（現在瀧明神が祀られている場所）に定めたとも記される。

だんじりは、東富貴宝蔵院富貴地区文書の「檀尻再建寄附帳」に、文久 3 年(1863)の天誅組（尊皇攘夷派浪士の一団）の兵乱により焼失しただんじりを、明治 14 年（1881）に再建しようと寄附を募っていることから、江戸時代には現在と同じく神輿とだんじりが巡行する祭りの形ができあがっていたと推測される。

また明治時代に記された同地区文書「祭日役割」には、のぼりやほこ、太鼓や神輿等の担当者が記されるほか、明治 26 年（1893）には東富貴の神輿の飾物を新調したことが記され、必要に応じて修繕しながら、神輿やだんじりは現在に受け継がれている。



昭和 7 年の神輿渡御の様子
（東富貴の丹生神社）

祭りにおいて、神輿は名迫明神社にも渡御する。これは、富貴の旧家で地士（地侍）であった名迫次郎右衛門伊光(1676～1758)が、正徳 5 年(1714)から享保 3 年（1718）にかけて富貴を襲った獣害と凶作の時に、そして孫の次郎右衛門行雄(1743～1834)が、天明年間（1781～1789）の飢饉の時に、それぞれ領主である高野山に掛け合い、富貴村への救い米や年貢の減免を受けるために尽力したことによる。富貴の人々はこの恩に報いるために名迫明神社を建立し、祭りでは神輿が渡御する。



名迫明神社

(2) 建造物等

【東富貴の丹生神社】

東富貴の丹生神社は本殿、式殿、拝殿、社務所、御輿庫、一ノ鳥居、二ノ鳥居、石燈籠により構成される。

文明 10 年（1478）に丹生明神（丹生都比売大神）を勧請（かんじょう）し、東富貴に座し、東富貴の氏神である。

「東富貴区神社明細帳」から、本殿は文久 3 年（1863）に焼失、その後慶応 3 年（1867）に再建されたもので、一間社春日造、銅板葺であることがわかる。



東富貴の丹生神社

【西富貴の丹生神社】

西富貴の丹生神社は本殿、拝殿、社務所、一ノ鳥居、二ノ鳥居、一ノ橋、二ノ橋、石燈籠により構成される。

丹生神社の勧請時期は不明であるが、西富貴に座し、西富貴の氏神である。当初、東富貴村の社を氏神としていたが、氏子（うじこ）争論があり、別に西富貴に勧請したという。

本殿は一間社春日造、銅板葺である。本殿は、大正年間及び以降の西富貴区の会計書類である「事務引継書」等に再建の記録はなく、明治時代には建立されていたと推測される。

拝殿前には、高さ 153cm、幅 55cm の砂岩製（さがんせい）の四角形燈籠が残されており、「嘉永三年庚戌九月日　施主井谷佐兵衛」の刻銘から嘉永 3 年（1850）に造立されたものであることがわかる。



西富貴の丹生神社



嘉永 3 年造立の石燈籠

【名迫明神社】

名迫明神社は、祠 1 社、石燈籠により構成される。享保 10 年（1725）に、名迫次郎右衛門伊光を祀る祠が建立され、天明 5 年（1785）には次郎右衛門行雄を祀る法起大権現の祠が建立された。明治 43 年（1910）には、法起大権現が東富貴の丹生神社に合祀され、祠はそのまま残されていたが、近年になり、かつて 2 社あった祠が廃され、伊光の祠 1 社が新しく建立された。

石燈籠は、高さ 196cm、幅 75cm の砂岩製の四角形燈籠であり、「文政五壬午十一月吉日」の刻銘から、文政 5 年（1822）の造立であることがわかる。



名迫明神社境内の石燈籠

(3)祭りの流れ

秋祭りは、はじめ東富貴の丹生神社から西富貴の丹生神社へ向けて神輿が渡御（とぎょ）する。これは、東富貴と西富貴の神は男神、女神で分かれ、まず東富貴から西富貴へ渡御するのは、対（つい）となる神を迎えに行く意味がある。

渡御行列は、御幣を先頭に一から八の順に進められる。途中、だんじりが先に富貴地区の東へ移動するが、行列になるときはこの順である。



渡御行列

渡御行列の順

一．御幣

二．ハナ・ミソ（面をつけた警護役）

三．神輿

四．カグラ（獅子頭（ししがしら）を背負う）

五．区役員、神社役員、渡御役（裃（かみしも）・法被（はっぴ）を着て金幣（きんぺい）・太刀（たち）・鉾（ほこ）・弓・矢・幡（はた）・笛・太鼓などを持つ）

六．各地区の御弊

七．子供が生まれた家族（男児が生まれた家は御弊を出す）

八．だんじり

① 東富貴の丹生神社→西富貴の四つ辻→西富貴の丹生神社

秋祭りの当日は、東富貴からの担い手は東富貴の丹生神社に集まり、西富貴からの担い手は西富貴の丹生神社に集まる。東富貴の丹生神社ではブク祓い（弔事があった者が一定期間を経て慶事への出席をするためお祓いを行うこと）、祝詞・奉幣などの神事を行った後、本殿前に置かれた東富貴の神輿に神霊を移し、鳥居下にあるだんじりを祓う。その後、渡御行列の順番で東富貴の神輿とだんじりが列を組んで進む。東富貴の神輿は西富貴の丹生神社へ向かうが、だんじりのみ、途中の西富貴の四つ辻で留まる。東の神輿は西富貴の北西の道を通って西富貴の丹生神社に渡御する。

東富貴の神輿が西富貴の丹生神社に到着すると西富貴の担い手はこれを迎え、境内に東富貴と西富貴の神輿を共に並べ神事を行う。



だんじりと参加者のブク祓い



西富貴の神輿（写真左）と東富貴の神輿（写真右）

② 西富貴の丹生神社→西富貴の四つ辻→東富貴の丹生神社

西富貴の丹生神社での神事が終わると、東富貴の神輿を先に渡御行列は、西富貴の神輿と共に東富貴の丹生神社へ渡御する。渡御行列の最後尾に、西富貴の四つ辻で留まっていただんじりが続く。



東富貴の丹生神社へ向う神輿

③ 瀧明神（白瀧不動尊）

渡御行列は、東富貴の丹生神社に向かうが、西富貴の四つ辻で留まっていただんじりは東富貴の丹生神社へは行かず、神輿よりも先に瀧明神へ向かう。その後、瀧明神から東の方向へ移動する。

このように、だんじりは、常に神輿の渡御の邪魔にならないように神輿の後方に続くことができる動きをとる。

④ 東富貴の丹生神社→瀧明神→名迫明神社→瀧明神

東富貴の丹生神社での神事が終わった東富貴と西富貴の神輿は、西富貴の神輿を先に瀧明神へ渡御する。東富貴と西富貴の神輿は瀧明神で休息した後、西富貴の神輿を先に名迫明神社へ向かう。名迫明神社で神事が行われ、終わると東富貴の神輿を先に再び瀧明神へ渡御し、瀧明神で神事が行われる。



瀧明神

⑤ 瀧明神→東富貴の丹生神社

しばらくすると、東の方へ移動していただんじりが瀧明神に戻ってくる。休息の後、東富貴の神輿、西富貴の神輿が出発し、その後にだんじりが続き、東富貴の丹生神社鳥居の下に移動する。

このように、東富貴の神輿と西富貴の神輿、だんじりが富貴地区を巡るのである。東富貴の丹生神社鳥居の下へ神輿が到着すると、東富貴と西富貴の神輿は祭りを盛り上げるため、東へ向って3度程行き来を繰り返す。最後に神輿をさし上げ、これをもって祭りを終える。



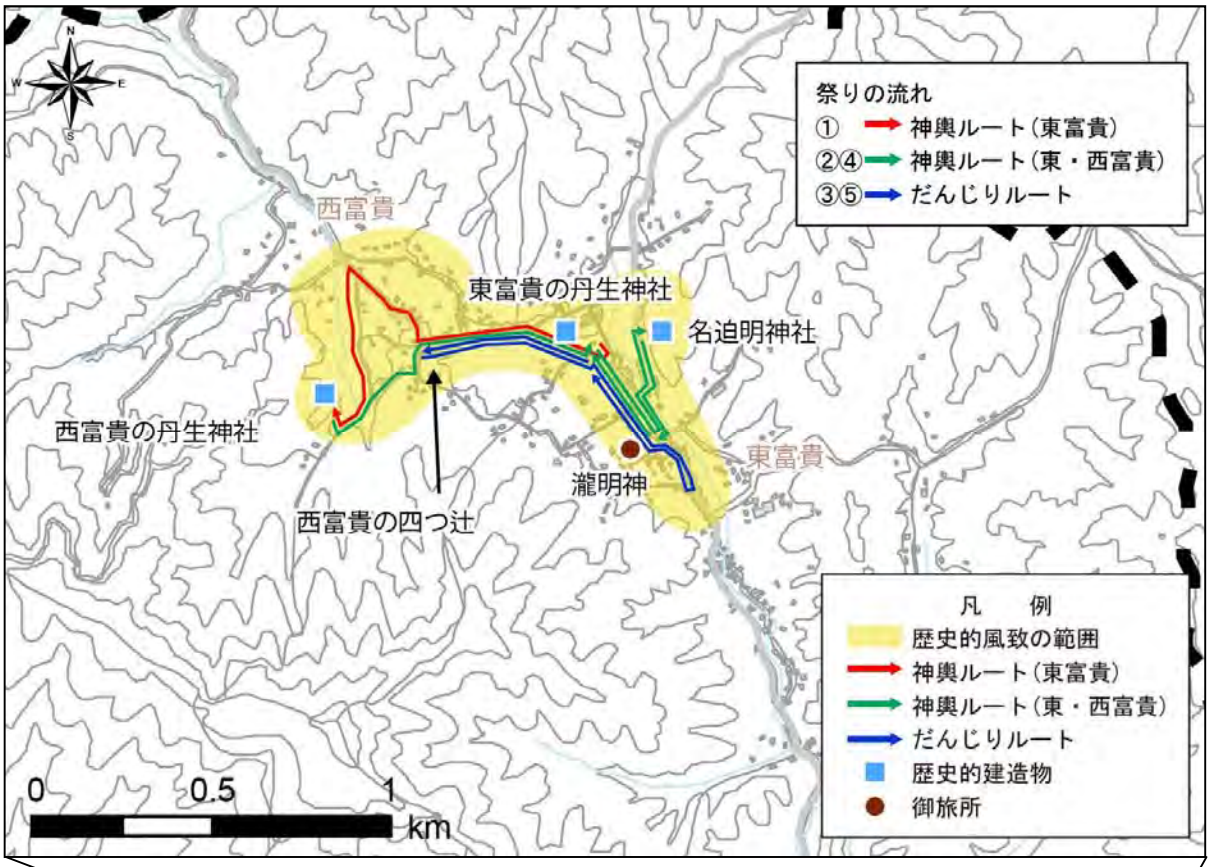
まちなかを渡御する神輿

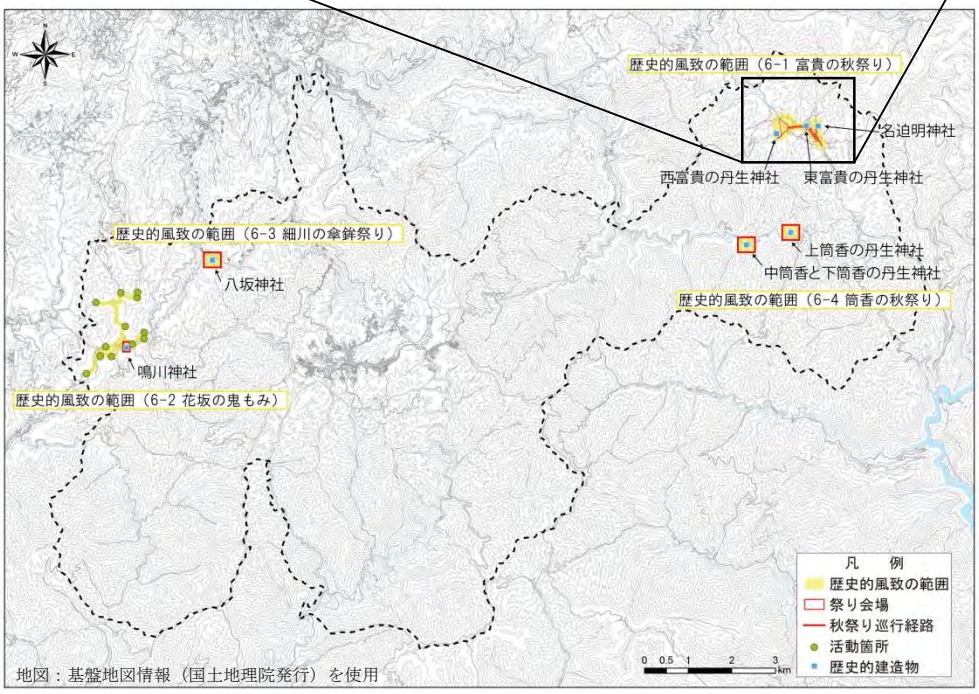
秋祭りには、男の子が生まれ宮参りが済めば、その家から御弊（ごへい）を出す。小学校5、6年の男の子に頼んで神輿の渡御のとき、持って回ってもらう。渡御には嫁と子供を抱いた姑、嫁の親が招待され参列する。女の子が生まれた時は渡御に参加するが御幣は出ない。また、新たに嫁いで来た嫁も、留袖（とめそで）を着て姑と一緒に渡御に参列する。これらは嫁や生まれた子供の披露である。



新生児のお披露目と御幣の様子

以上のように富貴の秋祭りは、江戸時代の社殿や石造物等の残る東富貴の丹生神社、西富貴の丹生神社、名迫明神社を神輿やだんじりが巡行して、収穫を感謝する祭りであるとともに、富貴の名迫家にも感謝する祭りでもある。





■富貴の秋祭りの活動範囲

６－２花坂の鬼もみ

(1)鬼もみの由来

花坂（江戸時代の花坂村）の代表的な祭りは、毎年 8 月 15 日の夜に鳴川神社で行われる鬼もみである。以前は、鬼もみが 8 月 16 日昼に行われ、その後、鳴川神社拝殿で風除けと農作物の豊作を願う風の御祈祷が 17 日晩に行われ、付属して盆踊りもあったが、現在は 8 月 15 日のみ行われる。

鬼もみは雨乞(あまご)いの行事といわれ、一人の鬼を大勢の若者が追いかけて捕(と)らえ、その鬼を大きな榊(さかき)の木に乗せてもむ。鬼もみの「もみ」とは上下に揺さぶることである。明治 12 年（1879）の「花坂村村会議決書」（花坂区有文書）には、「榊渡シ」と記され、明治 29 年（1896）に記された「村社鳴川神社宝物古器台帳」に、神楽(かぐら)用の鈴や祭礼用の締太鼓(しめたいこ)、鬼面が記されていることから明治時代には行われていた祭りであることがわかる。

鬼もみは、高野山麓の上古沢厳島神社(かみこさわいつくしまじんじゃ)（和歌山県伊都郡九度山町）の傘鉾(かさほこ)や椎出(しいで)厳島神社（和歌山県伊都郡九度山町）の鬼の舞と歌や口上が同じであることから、花坂の鬼もみも、鬼が呪文を唱え五穀豊穣・悪疫祓い・雨乞い等を祈願するこれらの祭りと同様のものであると推測される。



昭和 27 年（1952）頃の鬼もみの鬼



昭和 27 年（1952）頃の鬼もみの様子

(2) 建造物等

【鳴川神社】

鳴川神社は、本殿、社務所、拝殿、鳥居、石燈籠などにより構成される。また、境内地に隣接して観音堂、大師堂があり、神社の前面には祭りが行なわれる広場がある。

鳴川神社の創建は不明であるが、『紀伊続風土記』によると花坂村の氏神であることが記されていることから江戸時代には存在していた。

本殿は享保 3 年（1718）の焼失後に再建されたもので、一間社春日造銅板葺である。屋根はかつて檜皮葺であったが、昭和 8 年(1933)に銅板葺となった。

本殿前の小鳥居は、柱の直径が 22cm、高さが 257.5cm、花崗岩製の明神鳥居である。階段下の大鳥居は、柱の直径が 30.3cm、高さが 330cm、花崗岩製の明神鳥居である。どちらの鳥居も明治 8 年（1875）11 月に造立された。

拝殿前の一対の石燈籠は、どちらも高さ 198cm、幅 56cm の花崗岩製の四角形燈籠であり、「寛政五年十月吉日」の刻銘から寛政 5 年（1793）の造立であることがわかる。

大師堂の横には江戸時代の様相を呈す石仏が並び、石燈籠の竿の部分と考えられる部材が残されている。残存部の直径が 21cm、高さ約 55cm の砂岩製であり、「延享元年　南無大師遍照金剛」の刻銘から、延享元年（1744）の造立であることがわかる。



本殿



本殿前の小鳥居



階段下の大鳥居



大師堂



石仏と石燈籠の竿部分



拝殿前一対の石燈籠

(3) 鬼もみの流れ

鬼もみの前日に、鬼もみに使う大榊（おおさかき）を切り出しに行く。数メートルの大きな榊が必要となるが、何年も前から花坂の集落内で事前に栽培しておく。切り出す山の持ち主が忌みの時は、その山からは切らないようにしている。この祭礼を支える花坂の集落では、集落内の各所に榊を植えるが、大木となるため、できるだけ山から道路に運び出しやすいところで育てるようにしている。



榊の栽培

切り出された大榊は、鬼もみの会場となる鳴川神社前広場へ運ばれ、8 月 15 日の午前中に神主によりこの榊に御幣が付けられ、祝詞（のりと）、奉幣（ほうへい）など行われる。夕方、鬼もみ太鼓が終わると神主が大榊を祓い鬼もみがはじまる。



鬼もみでの鬼の棒振りと大榊

鳴川神社前広場の北側に大榊を垂直に立てて、その前に鬼が立つ。神主は太鼓の拍子で鬼もみの口上（カワギシ（川岸）ノネジロ（根白）ノ、カワギシノネジロノ、カワギシノネジロノ、オニ（鬼）アラワレシソウロウ（候））を唱える。口上の間、鬼は手にした棒を振り回す。口上が終わると、太鼓の連打に続いて、駈けだした鬼を、若者は大榊を引きずりながら追いかける。左右に逃げ回る鬼を捕まえると、鬼を大榊にのせ右回りに激しく回転させる。この所作を 3 度繰り返す。



大榊にのせられた鬼

最後に、鬼と若者は神前で大榊を立て、次のような口上を述べ、榊を神社へ奉納する。

「トウザイナンボク（東西南北）、ナミタカ（波高）シ、ナ（鳴）リヲシズメテ、コト（事）ノシダイ（次第）ヲゴラン（覧）アレ、ナムナルカワダイミョウジン（南無鳴川大明神）、ゴコクホウジョウ（五穀豊穣）、カナイアンゼン（家内安全）、ミズ（水）ノメグ（恵）ミヲアタ（与）エタマエ、コノ　ゴ（後）ニオモシロイオドリ（踊り）アリ」

口上が終わると、鬼は駆け足で鳴川神社・観音堂・大師堂を順に参拝し、社務所へ戻る。社務所では神主の手で、鬼の面がはずされる。社務所前では参拝者が列を作って待ち、順に鬼の面を頭上にいただき、無病息災（むびょうそくさい）を願い、鬼もみが終了する。

鬼もみは境内を縦横に駆け回る激しい祭りである。昔、若者が多かった頃は、体力に自信のある者はだれでも鬼もみに参加していたので、今よりもっと荒々しい祭りだったようである。鬼役は特に決まった者が務めることはなく、戦時中などは出征者が厄除けのために志願することもあった。

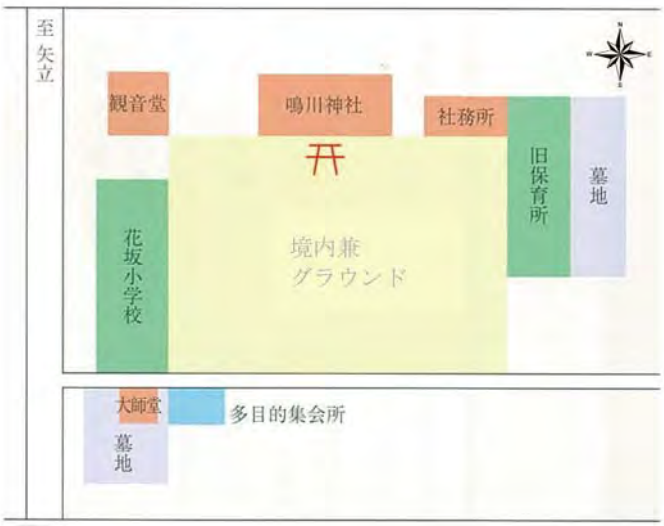


大師堂を礼拝する鬼

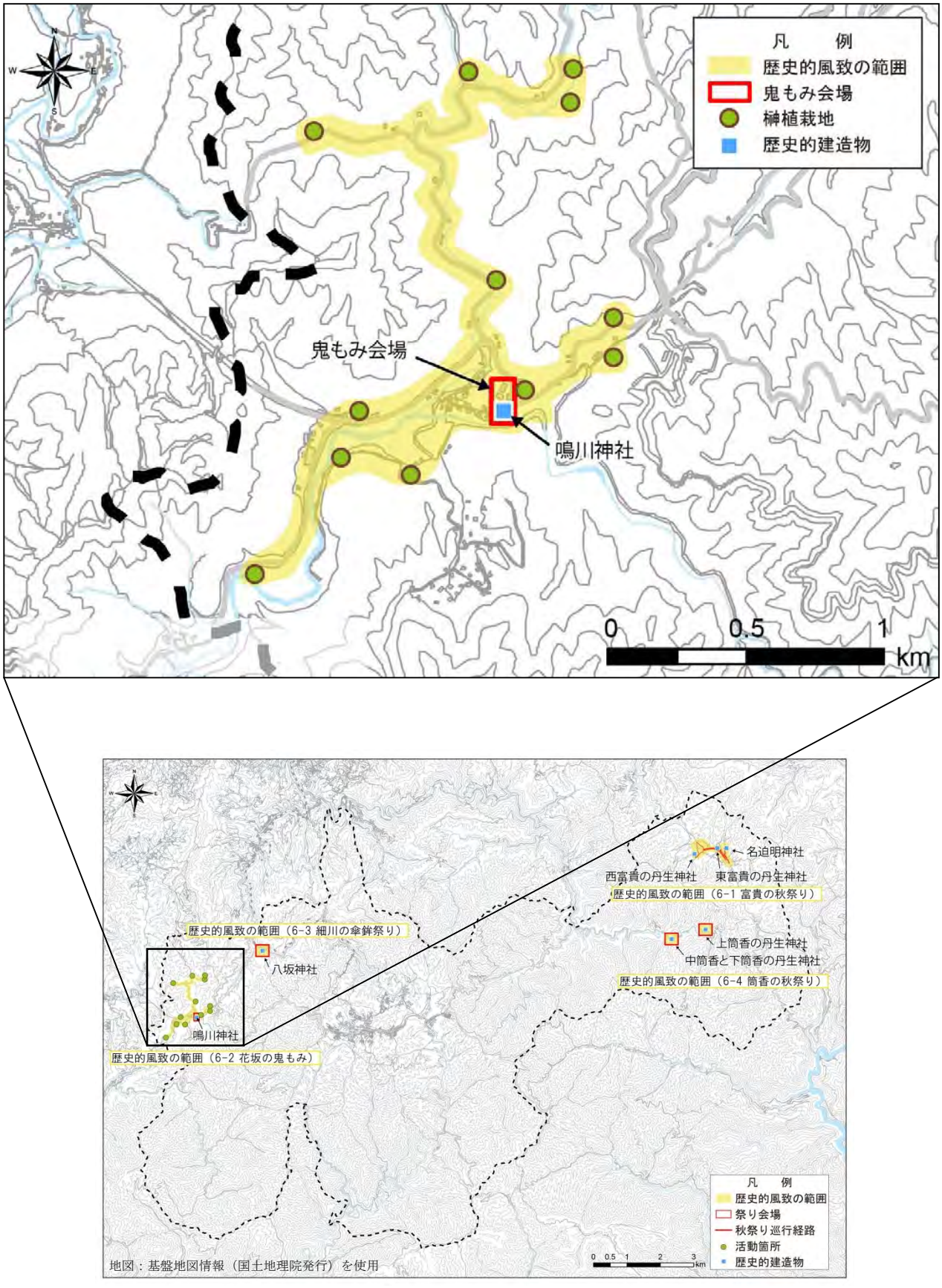


観音堂

以上のように鬼もみは、江戸時代に造立された本殿、鳥居や石燈籠などが残る鳴川神社で、集落の人が何年も前から育てた大榊が切り出されて行われる。集落各所に榊が植えられ、祭りのためにあらかじめ準備される。そして鬼が五穀豊穣や悪疫祓い、雨乞いの口上を述べるとともに、鳴川神社境内では大榊が奉納され、本殿・観音堂・大師堂を鬼が巡り、地域の人々の協力によって成り立つ祭礼である。



■鳴川神社近隣の建造物配置図



■花坂の鬼もみの活動範囲

コラム

○子供たちの活動　～鬼もみ太鼓～

8 月 15 日当日の午後からは、子供たちが花坂集落内を回る。回った家から祝儀を頂戴すると、家の前で鬼の面を着けた子供が棒振りをして芸を披露する。

夕方からは鬼もみ太鼓が集落の子供たちにより奉納され、10 数台の太鼓の合奏と、鬼の面を着けた小学生が棒振りをして口上を述べる。この鬼もみ太鼓は、昭和 50 年代から始められた。



村を回る子どもの鬼もみ



鬼もみ太鼓

６－３　細川の傘鉾（かさほこ）祭り

(1)祭りの由来

細川（江戸時代の細川荘）の代表的な祭りは、毎年 8 月 16 日に行われる傘鉾祭りである。傘鉾祭りは八坂神社境内を舞台にして東細川・西細川を含めた細川全体で行われる祭りである。直径２m 近い大きな傘鉾と、笹竹（ささたけ）を持った鬼が出て、雨乞いや疫病除けを祈願する。この笹竹は、傘鉾祭りが行われる八坂神社の前を流れる不動谷川沿いから採取される。

傘鉾祭りは、傘鉾に文久 3 年（1863）6 月の日付があることや、傘鉾の幕箱には享和 3 年（1803）10 月の日付があることから、江戸時代には行われていたと推測されている。

高野山を源とする不動谷川沿いでは、細川の八坂神社の傘鉾祭りと上古沢厳島神社（和歌山県伊都郡九度山町）の傘鉾と椎出厳島神社（和歌山県伊都郡九度山町）の鬼の舞が同じ 8 月 16 日に行われる。神事の時間が上流の細川の傘鉾祭りから始まり、次に上古沢の傘鉾、そして日暮れに椎出の鬼の舞が行われ、順に経過する。いずれの地も高野山寺領という歴史があり、悪疫祓い・雨乞い等が祈られるほか、傘鉾を用い鬼が舞うところが共通している。

(2)建造物等

【八坂神社】

八坂神社は、本殿、拝殿、社務所、弁財天社、宝蔵、鳥居、石燈籠により構成される。八坂神社は、素戔嗚尊（すさのおのみこと）を主祭神とするが、勧請年月日は不詳である。祇園牛頭天王（ぎおんごずてんのう）の「祇園さん」として親しまれている。細川に座し細川村の氏神である。本殿は一間社流造、銅板葺である。残された棟札（むなふだ）から慶応 3 年（1867）の建立であることがわかる。元は檜皮葺であったが、明治 41 年（1908）に銅板葺となった。拝殿は桁行五間、梁間三間、入母屋造銅板葺で、昭和 17 年（1942）に再建された。拝殿前には、高さ 202cm、幅 95.5cm の花崗岩製の四角形燈籠があり、「文政十年丁亥五月」の刻銘から文政 10 年（1827）の造立である。



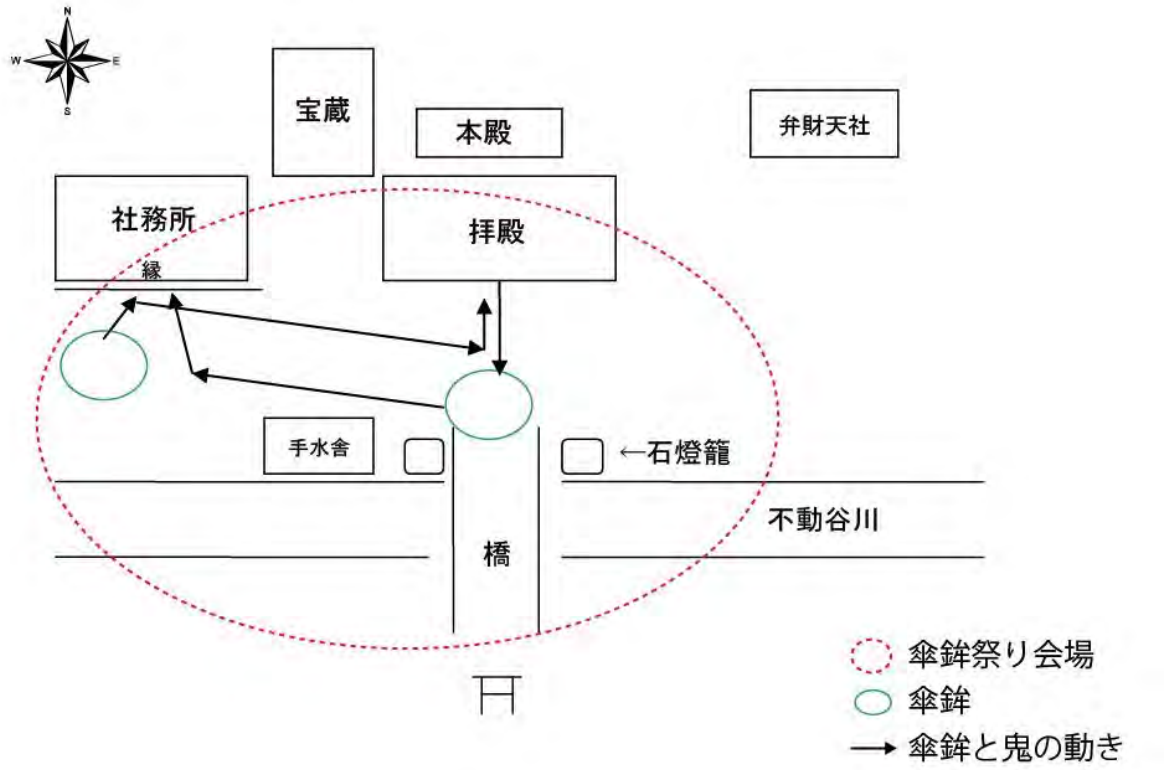
拝殿前の石燈籠



八坂神社



拝殿



■傘鉾祭り会場図

(3) 傘鉾祭りの流れ

祭り当日、社務所の前に傘鉾をしつらえる。傘の上には蛇の作り物を載せ、傘の周囲には龍の絵の幕が付けられる。拝殿では、細川の集落で収穫された米や野菜などが供えられ、宮司により祝詞・神楽(かぐら)奉納などの神事が行われる。また、鬼が傘鉾祭りで振る細い笹竹を伐採して用意する。この笹竹は細川の集落を流れる谷水の近くや、不動谷川の流域に育つものである。

これらの準備が終わると、鬼役と傘鉾を動かす役、太鼓の役をする区長と神社役員は、拝殿から社務所へ移る。鬼役は清めの酒を飲み、鬼の面・装束(しょうぞく)・わらじを身につける。



笹竹を振る鬼

傘鉾祭りで使用される赤鬼の面は、頭上両側に 2 股の角を生やし、こぶ状の突起をあらわした大きな眉と、ややしかめた大きな眼、先がとがった鼻には特殊な長い鼻孔(びこう)をあらわし、大きく開けた口に長い牙を上下左右に 4 本、歯を上下 4 本ずつあらわす。特徴的な長い鼻孔の表現は、椎出厳島神社（和歌山県伊都郡九度山町）の鬼の舞で用いられる南北朝時代頃製作の鬼面(きめん)と同様の特徴である。

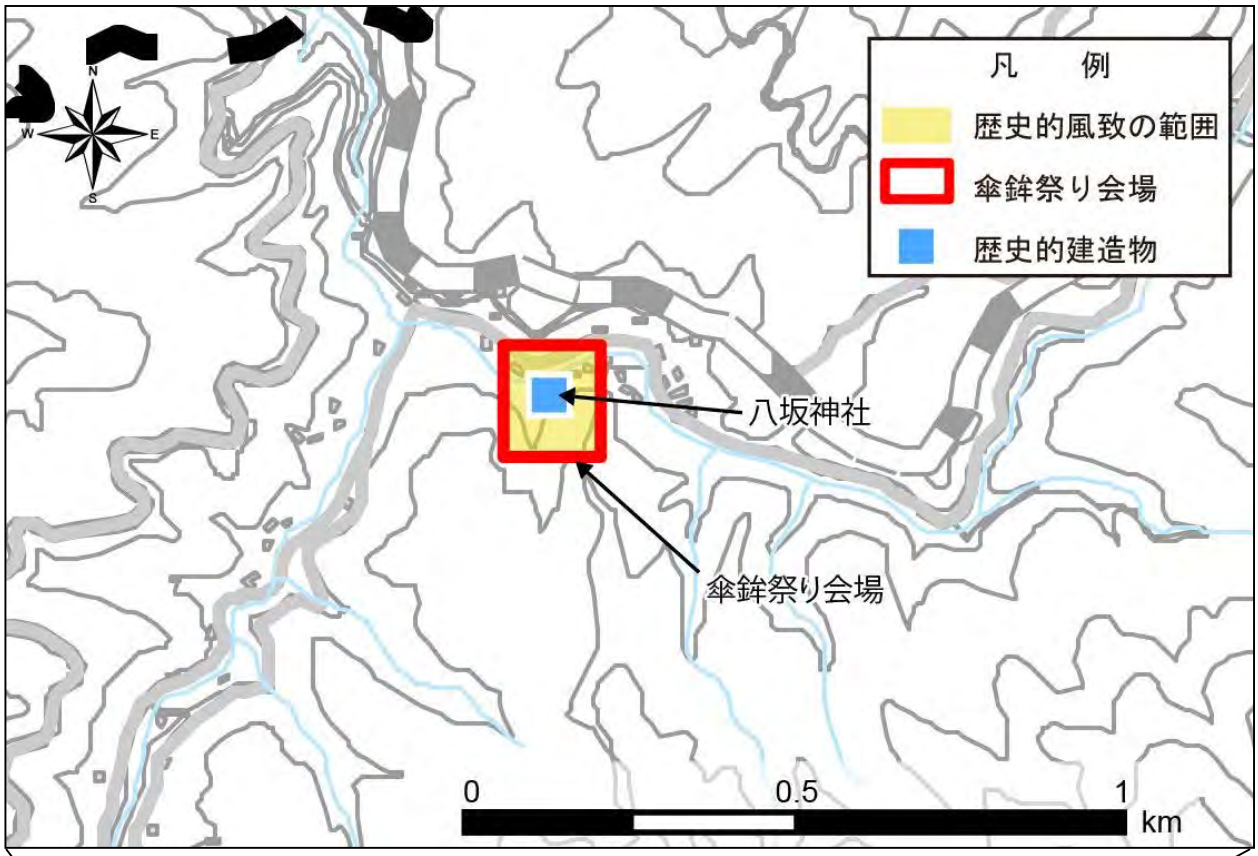
また、納入箱の墨書によれば、宝暦 5 年（1755）の段階で面箱は二つあったことから、赤鬼面と対(つい)になる青鬼面も伝わっていた可能性が高い。箱の墨書により、江戸時代には祭りに鬼面が使われ、祭りが行われていたと推測されている。

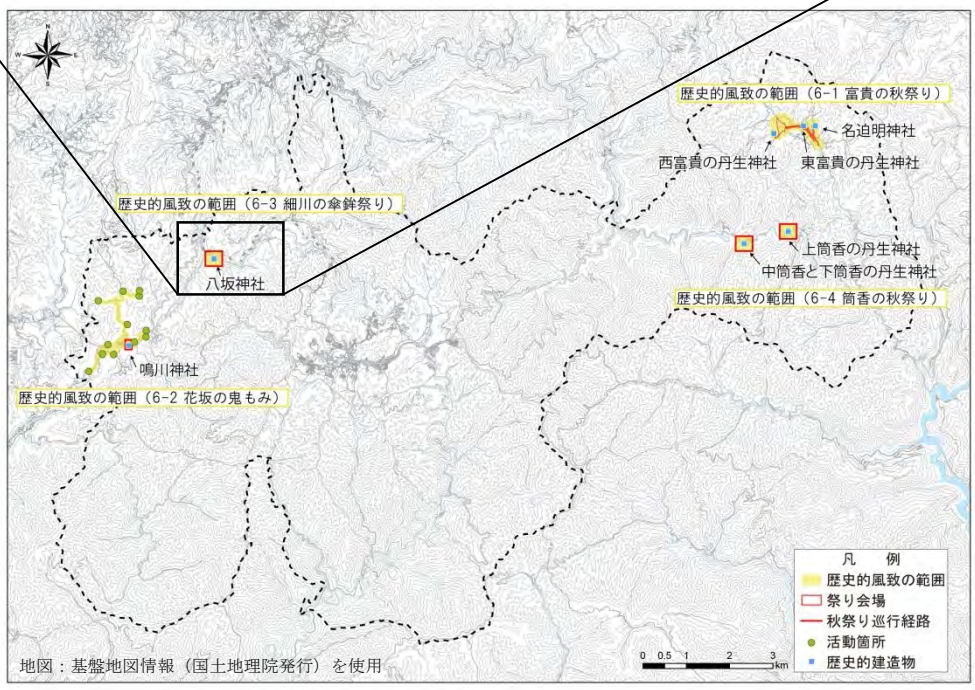


傘鉾と鬼

社務所前に準備された傘鉾の中に、口上や太鼓を打つ役の神社役員が入り、傘鉾を社務所の縁近くに移動させる。社務所で待つ鬼は宮司から祓いを受け、区長の介添えを受け、2mほどの笹竹を持ち、縁に移動した傘鉾の前に立つ。鬼と傘鉾は「ヨーソロイ（ヨーサライ）」の口上に合わせて、神社正面まで移動する。そこで鬼は神前に向かって立ち、扇子(せんす)で笹竹を 3 度叩き、笹竹を右、左、右頭上、左頭上、右頭上に振りながら一歩ずつ前進する。拝殿の前の石段まで達すると、同じ所作で後退する。3 度目は拝殿を通り抜け、神前へ上がり控える。宮司の祝詞が終わると、鬼は神前から拝殿の石段まで後退し、境内の参拝者の方へ向き直り「オット、ノケ」（「そこをのけ」の意味をいう）と発し、笹竹で参拝者の頭上を祓って回る。鬼と傘鉾は社務所へ戻り、鬼は装束を解く。区長は鬼の面を持って参拝者の間を回り、参拝者は鬼の面を頭上にいただく。拝殿では、この後参列者が玉串(たまぐし)をあげ祭礼が終わる。

以上のように傘鉾祭りは、不動谷川沿いの細川の集落の人が、流域の笹竹を準備し、江戸時代に建立された八坂神社本殿や石燈籠のある八坂神社境内で行われる祭りである。





■細川の傘鉾祭りの活動範囲

６－４　筒香の秋祭り

昔から筒香の集落は、南と北に高い山をいただく丹生川の清流に沿って点在し、上筒香・中筒香・下筒香の集落を形成している。水田は少なく限られた耕地は急傾斜の段々畑であり、人々は農業を営むかたわら、林業にも従事してきた。高野山寺領であったため、農産物や林産物を高野山に運び高野山を支えてきた。

秋祭りは豊作を祈り、集落の人が集まって餅投を楽しむ祭りである。祭りは、上筒香集落では、上筒香の丹生神社で執り行われ、中筒香及び下筒香集落では、中筒香と下筒香の境界線上に建つ丹生神社で執り行われる。

(1) 上筒香の秋祭り

①建造物等

【上筒香の丹生神社】

上筒香の丹生神社は、本殿、拝殿、鳥居により構成される。本殿は一間社春日造、銅板葺である。上筒香区には大正 15 年（1926）の「神社分祀願」などの丹生神社関係記録が残されている。本殿は、これらの記録によると明治 40 年（1907）以前に建立されていたようであり、以降の再建記録もないことから、明治時代には建立されていたと推測される。

本殿前の石階段は 7 段花崗岩製であり、袖石に「宝暦十二年九月五日」の刻銘があることから、宝暦 12 年（1762）の造立であることがわかる。



上筒香の丹生神社



本殿

②祭りの由来と流れ

上筒香の秋祭りは、上筒香の丹生神社境内で行われる。上筒香の秋祭りは、『紀伊続風土記』によると「祭礼六月、十一月十一日、社領田地若干あり」と記されているが、江戸時代に行われていた 11 月の祭りが秋祭りに該当すると推測されている。

1980 年代までは 10 月 10 日に行われていたが、現在は 10 月第 2 週の体育の日に開催される。



餅投

祭りの日、家では柿の葉寿司などのごちそうを作る。柿の葉寿司は、柿の葉で包んで押した寿司であり、祭りや慶事に欠かせない郷土料理である。集落の人は近所の家や祭りの準備会場に持ち寄って食べてから、丹生神社に参拝する。宮司による神事の後、餅投が行われる。この餅は、上筒香の集会所で地域の人が集まって準備するもので、昔から地域の人が豊作を願う秋祭りを盛大にしようと協力して行っている。

(2) 中筒香と下筒香の秋祭り

①建造物等

【中筒香と下筒香の丹生神社】

中筒香と下筒香の丹生神社は、本殿、拝殿、鳥居、石燈籠により構成される。

『紀伊続風土記』によると、「本社、末社五社〈八幡宮、四天王社四社〉、上拝殿・中拝殿・下拝殿、中村（中筒香村）・下村（下筒香村）の間にあり、両村の氏神なり、宮作り上村と同じ、応仁二年の棟札あり」と記されることから、応仁２年(1468)に社殿があったことがわかる。本殿は一間社春日造、銅板葺である。下筒香区有文書の「上遷宮勧定帳」によると、明治 13 年（1880）に再建されたことが記されている。

拝殿前には、高さ 225.5cm、幅 77cm の砂岩製の四角形燈籠があり、「萬延元年庚申歳九月吉日」の刻銘により万延元年（1860）の造立であることがわかる。



中筒香と下筒香の丹生神社



本殿



拝殿前石燈籠

②祭りの由来と流れ

中筒香と下筒香の秋祭りは、中筒香と下筒香の境界線上に建つ丹生神社境内で行われる。中筒香と下筒香の秋祭りは、『紀伊続風土記』によると「祭礼六月、十一月十二日なり」と記されているが、江戸時代に行われていた 11 月の祭りが秋祭りに該当すると推測されている。

上筒香の秋祭りと同じく、1980 年代までは 10 月 10 日に行われていたが、現在は 10 月第 2 週の体育の日に開催される。上筒香の秋祭りと同日に行われるのは、同じ宮司が祭礼を司っているからである。



餅投

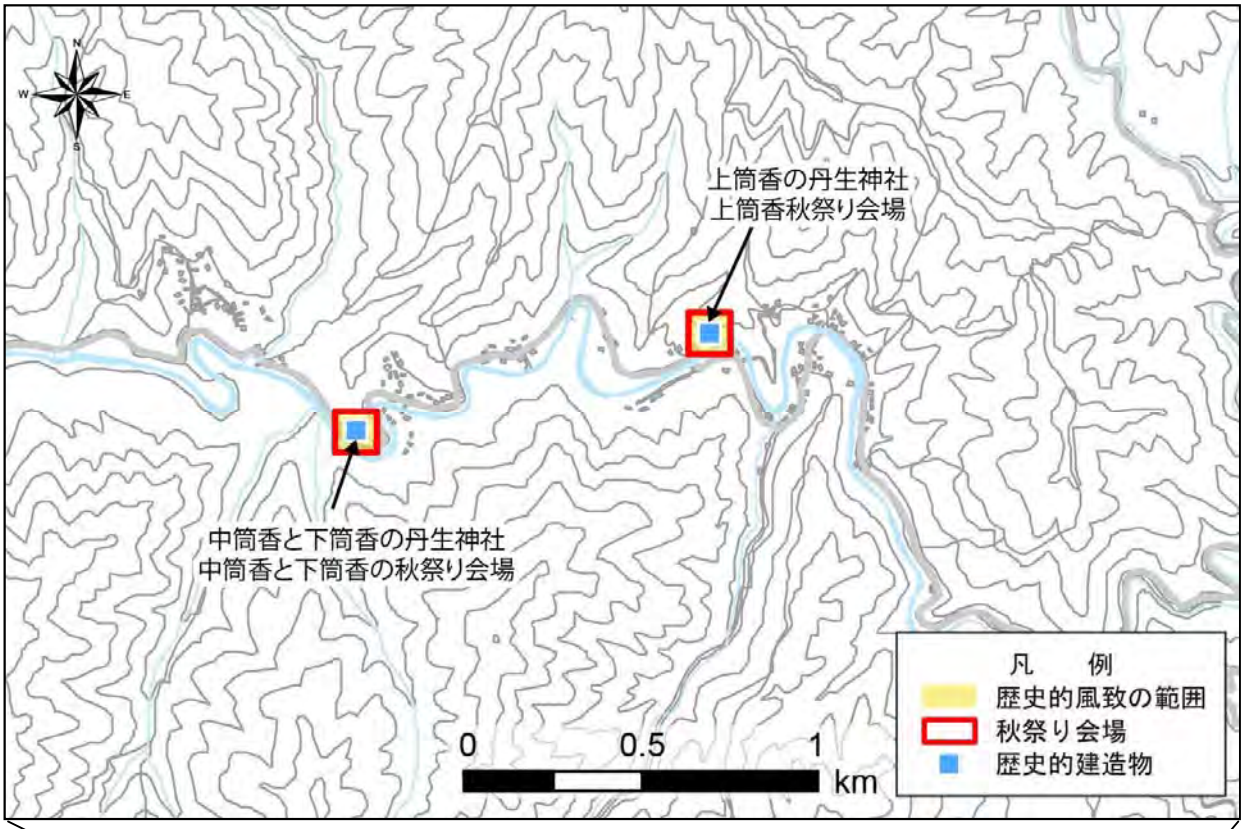
祭りの日、家では柿の葉寿司などのごちそうを作る。柿の葉寿司は、上筒香の集落と同様に祭りや慶事に欠かせない郷土料理である。集落の人は近所の家や祭りの準備会場に持ち寄って食べる。

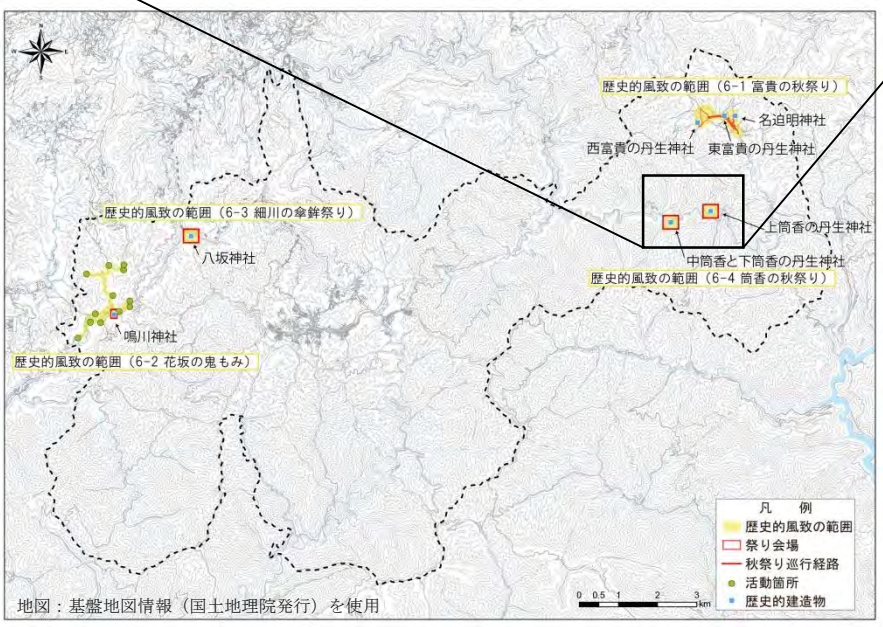
そして、集落の人は丹生神社にお参りをし、豊作を祈り、餅投で餅を拾って楽しむ。上筒香の秋祭りと同様、中筒香と下筒香の秋祭りでも中筒香の集会所で餅投の餅が沢山準備され、地域の人が協力して行われている。

以上のように、筒香の集落では上筒香の丹生神社、中筒香と下筒香の丹生神社で、豊作を願う秋祭りが連綿と続いている。本殿、石階段や石燈籠等の歴史的建造物のある境内で、集落の人が集まって餅投が行われる。

上筒香の秋祭りと中筒香と下筒香の秋祭りはどちらかが先か後になって、時間差で行われるため、かつて集落に子供が多かった頃は、子供たちは歩いて二つの丹生神社に行き、餅を拾った。

筒香集落の耕地面積は少ないが、農業と林業を行って自家用の食糧をつくり、高野山へも野菜等を送り、誇りを持って支えてきた。秋祭りでは、集落の人が集まり、また外に出た人も戻ってきて家や集会所で柿の葉寿司を食べ、丹生神社では餅投を楽しむのである。



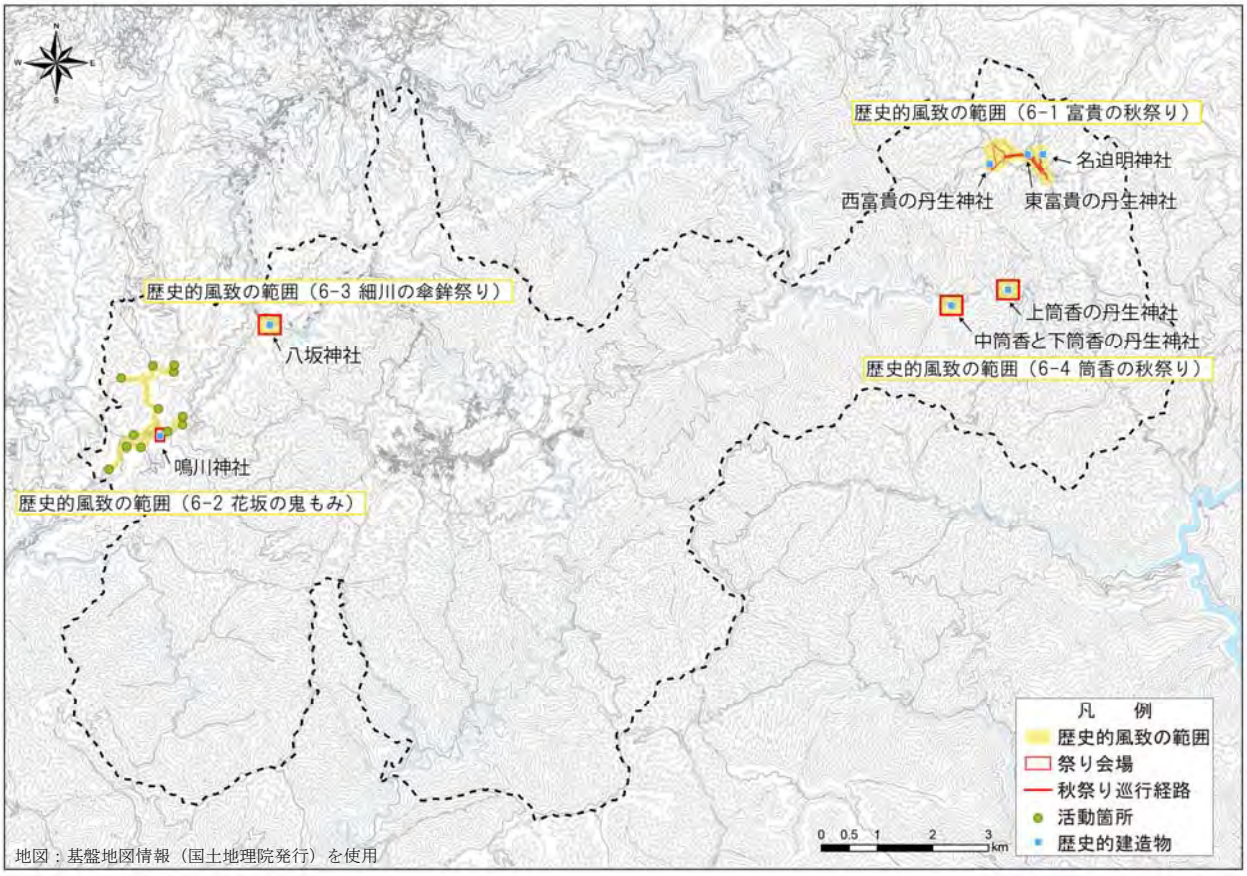


■筒香の秋祭りの活動範囲

まとめ

高野山を取り巻く周辺集落の祭礼のうち、富貴の秋祭りは、江戸時代に熊野へ向かう街道筋の宿場町として栄えた富貴の姿を偲ばせるものである。花坂の鬼もみは、高野参詣の宿場町として栄えた花坂の賑わいを残しつつ、地域の人がお互いのつながりを深め、子どもたちにとっても、ふるさとの記憶となっていく祭りである。細川の傘鉾祭りは、農村ならではの雨乞いや疫病除けを祈り、地域で伝承を守って連綿と続けられている。筒香の秋祭りは、地域のつながりを保ちながら、村人どうしの結びつきを強くしてきたものである。

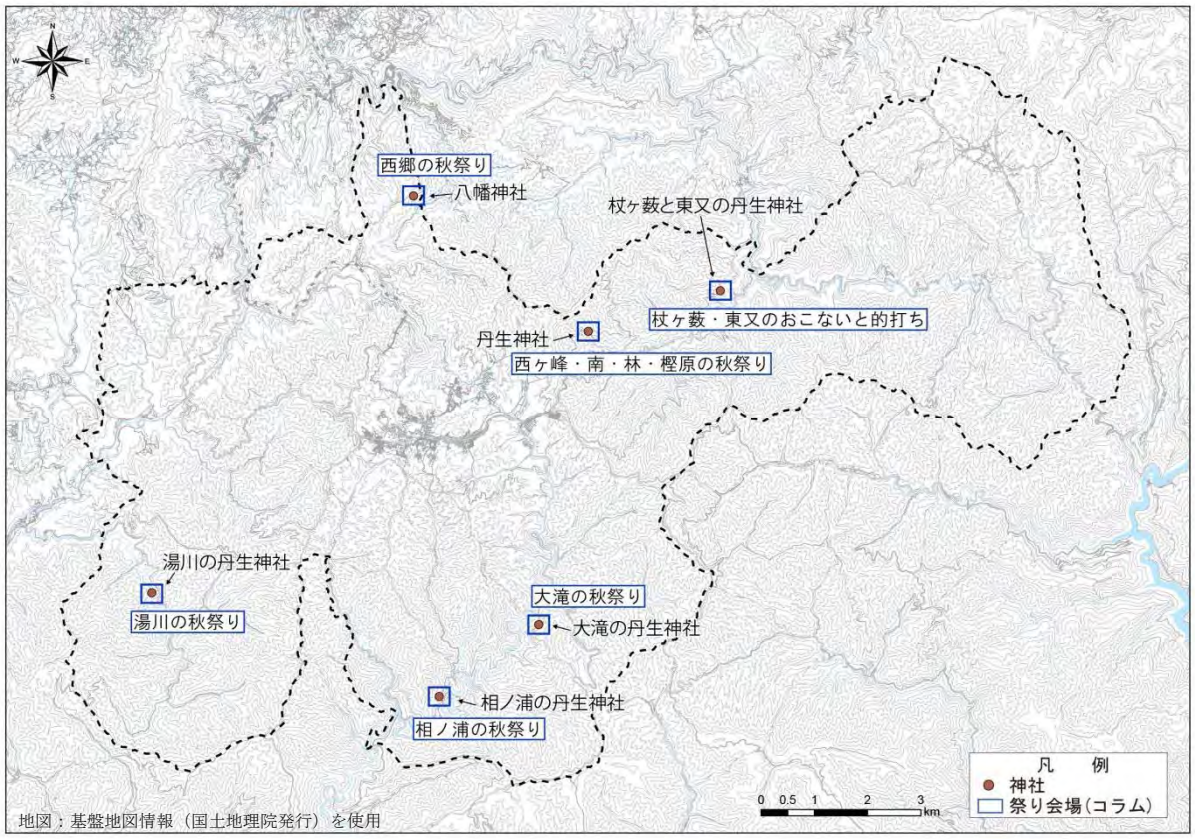
このように高野山を取り巻く周辺集落の祭礼は、それぞれの地区により祭りの形態は違うが、各集落独特の祭りの文化を保ちながら、人々の結びつきを強くしてきたものである。高野山と各地域の繋がりの中で続けられてきた祭りの景観は、後世に伝えていくべき歴史的風致である。



■高野山を取り巻く周辺集落の祭礼にみる歴史的風致の範囲

コラム　その他周辺集落の祭礼

富貴、花坂、細川、筒香以外の周辺集落でも神仏習合の祭りが行われ、神前読経も行われる。高野山の僧侶が派遣される場合もあり、餅投は秋祭りに共通して祭礼の最後に、集落の人が集まり行われる。



■その他周辺集落の祭礼

○西郷の秋祭り

西郷の秋祭りは、10 月 15 日に近い土曜日・日曜日に氏神である八幡（はちまん）神社で行われる。八幡神社の勧請年月日等は定かではないが、弘法大師空海の頃に八幡神が祀られたという伝承がある。

祭りの前日に餅つきや幟（のぼり）の準備などをし、当日の午前中は、前日についた餅を大きな半切（はんぎ）り（たらいの形をした底の浅い桶（おけ））に入れ、神社役員・青年団が地域内を練り歩き、八幡神社へ移動する。午後からは神社境内に組んだやぐらから、神社役員・青年団による餅投が繰り広げられる。



秋祭り神事の準備

○杖ヶ藪・東又のおこないと的打ち



的打ち

杖ヶ藪と東又の「おこない」「的打ち」は年の初めにその災いを除き平安と五穀豊穣を祈る祭礼で、金剛峯寺で行われる修正会と同じ意味の祭礼である。

1 月 3 日午後に杖ヶ藪と東又の氏神である丹生神社で行われる。

丹生神社の社務所に大日如来の軸を掛け、その前に供え物、ゴウの札（牛玉宝印）を並べる。

集落の人は燈明と線香をあげ、般若心経を唱え拝礼し、ゴウの札とお下がりの餅をいただく。ゴウの札は蔵の扉に貼ったり、しめ縄に付けたあと柿の木に結び付けたりする。燈明の火が燃え尽きると、会食後「的打ち」が行われる。的打ちは、拝殿の西端に的を設け、拝殿の東側にある社務所から酒で清めた 7 本の矢を 2 名の神主が交互に射る。矢が命中すると大麻を振り合図がある。これを 3 度繰り返し、2 名の神主はそれぞれ 21 回矢を射て的打ちが終わる。

○西ヶ峰・南・林・平原・樫原の秋祭り



塩サバを焼く

秋祭りは 10 月 13 日に丹生神社で行われる。丹生神社は西又とよばれるところにあることから、西又神社ともいわれ、西ヶ峰・南・林・平原・樫原の 5 集落の氏神である。

13 日の午前中に丹生神社境内の清掃・供え物の準備・幔幕張り・社務所のイロリへの炭火の準備などを行う。

午後から神主による祓い、お供え、祝詞、玉串などの神事がある。神事が終わると、社務所内で餅投が行われる。直会では、神前に供えた塩サバを炭火で焼いて食べる。

○相ノ浦の秋祭り



餅投

相ノ浦の秋祭りは 10 月 17 日に行われる。祭り前日には集会所で餅つきをする。当日は午前 10 時頃から祓い・お供え・祝詞・玉串などの神事があり、その後、神子舞があり、集落の人が務める宮守の唱え事の後、太鼓・鼓 2 名・銅拍子 (シンバルのような楽器) の合奏に合わせて、神子が舞う。集落の人が全てを担い合奏も行う。最後に餅投が行われる。

○大滝の秋祭り



餅投

大滝の秋祭りは 10 月第 2 日曜日に行われる。丹生神社の神前に野菜・果物・塩サバなどを供え、般若心経を唱えた後、餅投が行われる。昔は 10 月 15 日と 16 日の行事で、15 日に一年交替の神主の家で餅をついた。

祭り当日は、朝から神社本殿前の石段脇に 6 本の幟（のぼり）を立て、餅は大きな半切りに盛り、御幣（ごへい）を立て、それを神輿のように担いで神主の家から神社へ向かう。神前に供えた重ね餅は、村の全戸に配れるように切り分けられ、餅投が行われて祭礼は終了する。

○湯川の秋祭り

湯川の秋祭りは 10 月 15 日に近い日曜日に行われる。祭り前日の午前中に集落の人が湯川の集会所に集まり、餅投用の餅つきをし、午後からは幟の準備などの宮飾りをする。集会所には遷宮の時に御神体を移す仮拝殿と呼ばれる施設があり、この前にお供えをする。祭り当日は、定刻に般若心経を唱えた後、餅投が行われる。餅投は 1 段高い丹生神社と耳（みみ）神社の境内から、旧湯川小学校校庭に向かって投げられ、餅投によって祭礼が終了する。



餅投



耳神社